

令和元年度
社員旅行記

令和元年度
社員旅行記

令和元年度
社員旅行記



株式会社 第一コンサルタンツ

序 文

第一コンサルタンツでは毎年、仕事が一段落する5月～6月に社員研修旅行をしています。近年では、台湾(H25)、東京・横浜(H26)、北海道(H27)、グアム(H28)、黒部・立山(H29)、そして会社創立55周年の平成30年には3班に分かれ、第1班がイタリア、第2班がフランス、第3班がドイツへ行きました。

令和元年の今年も3班に分かれ、第1班と第3班は沖縄、第2班はシンガポールに行きました。

旅行先は、旅行会社に予算内で数案提案していただき、社員からアンケートをとって決めています。平成30年からは班毎に別々の所に行くことにしています。今年は、たまたま沖縄の希望が多く、2つの班が沖縄になりました。

これまでは海外旅行のみに家族同伴を認めていました。しかし、今年から国内でも家族で参加するように呼びかけたところ、8組が家族で参加してくれました。第3班には新婚の夫婦もいました。

わが社は、官公庁や地方公共団体が社会資本整備のために発注する調査、測量、設計に関する業務を受託しています。毎年、多忙な仕事の間隙を縫って社員旅行をするのは、社員が同じ釜の飯を食べ、お互いが助け合いながら見聞を広めることで、社員同士の絆を深め、視野を広げ、それが結果として社業の発展に繋がると信じているからであります。

わが社では参加者全員に旅行記を執筆してもらっています。本書は、社員が執筆した旅行記の中から23編を抜粋して綴ったものです。

旅行記を読むと、社員がどのような視点でものを見、そして考えているのかを知ることができます。

抜群の文章力を持った社員、独特の感性を持った社員、優れた論理的思考をする社員、日常業務とは関係ない分野の専門知識を持った社員などを発見すると嬉しくなります。小学生のような文書を書いていた社員が、旅行記を書くたびに成長する姿を見るのもまた楽しいものです。旅行記は社員の成長、そして会社の成長の証でもあります。

拙い旅行記ではありますが、ご笑覧くださり、第一コンサルタンツがどのような雰囲気
の会社であるかを少しでも知っていただければ幸いです。

令和元年7月23日
代表取締役社長 右城 猛

目 次

序 文

目 次

第 1 章 沖縄・シンガポール旅行の概要 1

第 2 章 沖縄 5

第 3 章 シンガポール 28

沖縄・シンガポール旅行の概要

3 班の概略

行き先	月日	参加者	訪問地
沖縄班	5月9日(木)～11日(土)	社員27名、家族0名、添乗員1名	那覇市, 沖縄北部, 沖縄南部
シンガポール班	5月16日(木)～19日(日)	社員32名、家族6名、添乗員1名	市内観光, ※自由行動
沖縄班	5月23日(木)～25日(土)	社員37名、家族2名、添乗員2名	那覇市, 沖縄北部, 沖縄南部



令和元年度社員旅行訪問先

第一班, 三班(沖縄)の日程

5月9日(木) 5月23日(木)	高知→松山→沖縄 那覇市観光	松山 10:55→那覇空港 12:30(ANA1883) 那覇空港 13:00→世界遺産 首里城公園 13:40 世界遺産 首里城公園 15:00→ホテル 16:15 ホテルモントレ沖縄スパ&リゾート泊
5月10日(金) 5月24日(金)	沖縄本島北部観光	万座毛(沖縄随一の景勝地), 沖縄美ら海水族館(イルカのオキちゃん劇場), オリオンビール園やんばるの森(昼食), ワルミ大橋(コバルトブルーの広がる絶景ドライブコース), 古宇利大橋, 古宇利浜・古宇利島物流センター, 屋我地大橋, T ギャラリー沖縄 byDFS ステーキハウス 88 国際通り店で夕食 ホテル JAL シティ那覇泊
5月11日(土) 5月25日(土)	沖縄本島南部観光 沖縄→松山→高知	沖縄ワールド玉泉洞・スーパーエイサーショー 那覇空港 13:20→松山空港 15:05(ANA1884) 松山空港 15:30→会社 18:00

第二班(シンガポール)の日程

5月16日(木)	高知→広島→シンガポール	広島空港 10:25→シンガポール・チャンギ空港 16:45(MI867)【時差：-1時間】 チャンギ空港 16:45→ウルフギャングステーキハウス・シンガポール 17:30 マンダリン オリエンタル シンガポール泊
5月17日(金)	市内観光とショッピング	マーライオンパーク, マリーナベイサンズ, ギフトショップ, 天然ゴム利用の寝具店, ガーデンバイザベイ, レッドハウスシーフードにて昼食, キラキラ夜景ボート(ナイトショー: スペクトラ鑑賞) マンダリン オリエンタル シンガポール泊
5月18日(土)	自由行動	※出発まで自由行動 (セントーサ島, ユニバーサル・スタジオ・シンガポール, 市内等) マンダリン オリエンタル シンガポール 20:00→チャンギ空港 22:30
5月19日(日)	シンガポール→広島→高知	チャンギ空港 1:45→広島空港 9:00(MI868) 広島空港 10:00→会社 13:30

第一班(沖縄)

楠本雅博、宮脇工、畑中徳雄、酒井寿彦、村岡志郎、芝田和仁、山本裕子、富永敏絵、大和田菊代、佐藤香奈子、十河智麻、澤田亜由美、長崎悟史、細川公二、山本剛也、西森尚人、西村修、式地寛修、柴田昭英、岡内雅士、伊藤哲也、小松椋司、北村暢章、阿部一輝、児玉翔、宮崎卓巳、松本晃

JTB 添乗員 安達晃子



世界遺産 首里城(2019年5月9日)

第二班(シンガポール)

右城猛(右城絹枝、堀田祐希)、矢田部龍一、西川徹(西川明子)、小野明彦(小野善江)、渡部清隆(渡部由紀)、須内寿男(須内寛子)、弘田伸、工藤頌子、杉本梨菜、生田万祐子、小島由佳、中越紀子、窪添智津子、島崎令子、谷加奈、尾崎勝彦、北澤聖司、横山成郎、西岡徹、田中聖一、矢田康久、小松俊則、西村紘寛、森下昌裕、中平隆文、乾隼輔、矢野川稔、島内司、池愛夫、岩瀬誠司、金剛一、三本高義

JTB 添乗員 安達晃子



マーライオンパーク(2019年5月17日)

第三班(沖縄)

松本洋一、片岡寛志、山本幸栄、藤平美香、森本真由子、山本直也、有澤尚可、山本崇顕、西村研了、三浦貢一、又川嵩哉、森木雅陽、徳橋蓮、兵頭学(兵頭千春)、大利飛鳥、坪田沙希、片山直道、島村圭太、井上敬士、公文海斗、小松由和、那須太郎、那須滉樹(那須結衣)、吉田直起、高橋祐也、高橋昌也、有澤芳則、小島心平、千葉辰政、小笠原明弘、山中公貴、中平聖士、吉田萌、大橋紀輔、中山大翼、門田智也、川村直矢
JTB 添乗員 瀧本文雄、遠藤正稀



世界遺産 首里城(2019年5月23日)

2019年5月9日(木)～11日(土)

2019年5月23日(木)～25日(土)

沖縄

美ら島沖縄への研修旅行

営業部 調査役
宮脇 工 (2018年入社)

1. はじめに

初めて研修旅行に参加しました。

沖縄の梅雨入りは、平年5月9日ごろらしく旅行行程にドンピシャあてはまります。

妻から「雨男」と言われている私は、100円カップを購入し、準備万端です。

2. 美ら島沖縄にて

那覇空港へは、自衛隊F-15戦闘機の連続発進を、横目で見ながらの到着でした。

空港到着後、琉球王国の中心地である首里城から、沖縄研修旅行の始まりです。

首里城では、二千円札の図柄として採用された「守礼門」で記念撮影後、琉球石灰岩の加工と石積み技術の素晴らしい城壁を見つつ、正殿、南殿などを観光しました。ここでは琉球王国時代の、独自の様式美と美しい美術工芸などを見ることができました。

また、首里城公園の地下には、牛島大将率いる旧日本陸軍32軍の司令部があり、地下壕入り口を見ることができます。入り口は、厚さ1m程度のコンクリート造りです。その前で数人の若者が、笑顔でVサインの写真撮影の様子を見て、私は複雑な思いがしました。

首里城を後にしてホテルモントレ沖縄へ移動、夕食までの自由時間で、「海パンに着替えてビーチ」と思ったのですが、あいにくの小雨と風で寒くてビーチは無理、しかたなく屋内プールで水泳を楽しみました。

2日目は、沖縄屈指の絶景地と言われている万座毛から研修旅行スタートです。ゾウの鼻に似た奇岩など、波で洗われた琉球石灰岩の断崖絶壁を遊歩道から散策です。この景勝地は、海から見ればもっと素晴らしいだろう、と思いました。激しい波により、柔らかそうな琉球石灰岩のゾウの鼻が崩落する日も遠くないかもしれません。

つづいては、海洋博公園内の美ら海水族館です。ここでは、ジンベエザメやブラックマンタが泳ぐ大水槽やサメ博士の部屋などを満喫した後、オキちゃん劇場でイルカ、オキゴンドウのジャンプ、ダンスに拍手喝采です。大水槽の厚さ60cmアクリルパネルは、香川県内の企業の制作で、積層と接着技術は世界的に有名らしいです。



写真1 首里城の城壁、石畳



写真2 美ら海水族館の大水槽(ジンベエザメ、ブラックマンタ)



写真3 オキちゃん劇場のイルカによるジャンプ

海洋博公園のつぎは、全長約 2Km の古宇利大橋を通り、古宇利島へ渡って一服、大橋から青く美しい珊瑚礁の海を見ながら那覇市へ移動です。

那覇市では、国内で唯一の免税店である T ギャラリー 沖縄 byDFS でウインドウショッピング、高額な海外ブランド品に圧倒されました。私は、ブランド品の良さがよく分かりませんので、興味はほとんどありませんでした。

最終日の研修旅行は、沖縄県南部のテーマパーク「おきなわワールド」です。

ここでは、天然記念物の「玉泉洞」という国内最大級鍾乳洞からスタートです。玉泉洞では、つらら石、石筍の多さに驚きました。また、観光客が通行しやすいように、つらら石や壁面を削って空間を確保していました。高齢者への配慮が行き届いていると感じました。通路の鋼板上に落ちた水滴により、固結して積もった炭酸カルシウムを見てびっくりです。説明文によると、「亜熱帯地方などのつらら石は 3 年で 1mm 程度成長する」と書かれていました。本土の鍾乳洞と比較すると、かなり速いスピードで成長するとわかり納得しました。



写真 4 玉泉洞のつらら石

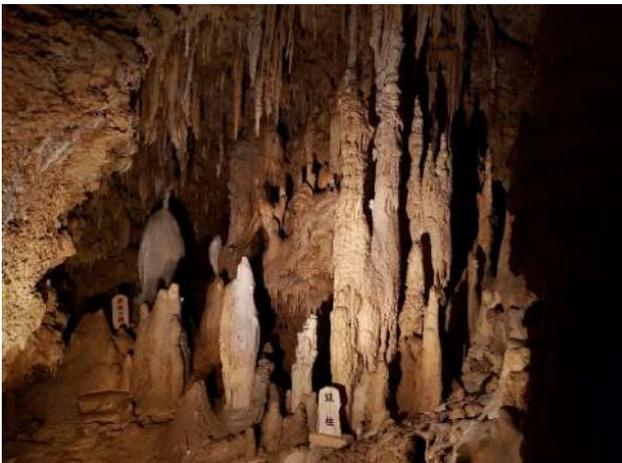


写真 5 玉泉洞の石筍、石柱

3. その他、美ら島で気になったこと

- ・民家がほとんど鉄筋コンクリート造

勢力が衰えないで通過する台風対策と第二次世界大戦で山が丸裸になったことなどによるらしい。

- ・琉球石灰岩など石灰岩を多用している。

アスファルト舗装の骨材や石畳、城壁などに利用している。舗装、石畳は、やはり濡れると滑るらしい。(四国ではアスファルト舗装骨材に石灰岩は使用不可になっている。) それでも利用していることは、他の石材確保が困難？

- ・本土では見慣れない街路樹

さすが亜熱帯地方、でも自治体によって樹種が違って見えるように見える。(樹木によっては、管理が大変では?)

- ・田んぼが見られなかった

米はどのように調達しているの、パン食が多い？(本土から輸送なら米価は高額か)

- ・空港で自衛隊機スクランブル発進時の民間航空機はスクランブル時の民間航空機は滑走路や上空で待機かな？(スクランブル発進が待機?)

4. おわりに

めまぐるしく移動した 3 日間の研修旅行でしたが、色々な人気スポットを回れて美ら島を満喫できました。

心配した雨は、バス移動中に降りましたが、歩行中の天候は曇りで、さほど暑くない研修旅行になり良かったです。

青空の松山空港に到着、3 日ぶりのお日様を見て四国の梅雨入りはもう少し先かな、と思いました。



写真 6 ほとんどが鉄筋コンクリート造の民家

自然と文化の魅力にふれた沖縄の旅

設計部 道路交通課
十河 智麻 (2018 年入社)

1. はじめに

沖縄を訪れるのは専門学校の研修旅行以来 2 度目、正直その当時の記憶も朧気になっていたのと、青い空と綺麗な海や景色を楽しめる機会とあって今回の社員旅行をととても楽しみにしていた。

2. 沖縄到着の実感と特徴的な風景

空港に着き、外に出ると青い空ではなく曇り空が迎えてくれた。曇りだったせいか、高知との気温差はそれほど感じなかった。その後バスに乗り込み那覇市内へ向かった。移動する際に目にとまったのが張り巡らされた金網のフェンス。米軍基地との境目である。那覇空港には旅客機に混ざり軍事戦闘機も駐まっているのが確認できた。高知では見られないその光景に沖縄に来たのだと実感した。車外の風景に目をやると、建物も高知とはずいぶん違う。屋根のほとんどが赤茶色で、門や屋根にシーサーが乗っている。シーサーは口を開けて幸せを呼ぶ雄、呼び込んだ幸せを留めるために口を閉じた雌が一對となっているとガイドさんが教えてくれた。

また、沖縄には電車がなく、モノレールとバス会社 4 社が沖縄の公共交通機関となっている。戦後は道路の整備よりも被害を受けた建物の復興を先に進めた為、結果的に電車が通れる道路幅を確保できなかったようだ。

3. 外国の影響を受けた建物や文化

バスに揺られて約 40 分、首里城公園に到着した。明治 12 年に廃藩置県によって沖縄県となるまで琉球王国があったその跡地で守礼門は昭和 33 年に、首里城は平成 4 年に再建され今の形となったようだ。沖縄では城のことを「グスク」と呼ぶ。グスクは「石垣に囲まれた所」という意味があり、当時の人々は石垣の高さを高くすることで威厳を表していたようだ。その事実を聞いた後に首里城の周りの石垣を見てみるとずいぶん高く、当時の権力の最高峰がここにあったのかと思いを馳せることができた。琉球王国以外の城が他の藩からの侵入を防ぐ為の「守り」の拠点に対し、首里城は政治を司るための外交の為の拠点であったようだ。門や外壁、衣服の染め加工(紅型)などに中国から伝わった技術を多用しており、今では当たり前になっている沖縄の文化は、過去に琉球王国が外交を盛んに行っていたからなのだと知ることができた。

首里城公園を後にし、宿泊先の恩納村に向かうため沖縄道に乗った。中央分離帯にハイビスカスが植えられており、赤や黄色の鮮やかな花が可愛らしかった。沖縄道では 2000 年に行われた九州沖縄サミットに合わせていち早く ETC が導入されたようだ。途中、道路の外に霊園が

あるのが確認できたが、沖縄のお墓は一般的な墓石ではなく、廟のような造りになっておりここにも中国など外国の文化の伝来を感じる事ができた。

また、トンネルの入り口にはシーサーが設置されており地域の特色を発見できた。

4. 沖縄のビーチの散策

沖縄道を降り、宿泊先に到着した。今回宿泊したホテルはリゾートホテルで、屋外にプライベートビーチがあった。あいにくの天気だったが夕食の 30 分ほど前に雨が上がり、少しの時間だったがビーチを散策することができた。沖縄の砂浜は白く、よく見てみると珊瑚礁や貝の欠片がたくさん混ざっていた。

散策していると視界に小さく蠢くものが映り、近づいてみると小さなヤドカリだった。それもたくさんいる。高知の砂浜でヤドカリを見たことが無かった私は嬉しさで移動の疲れが吹っ飛んだ。一緒にビーチを散策していた澤田さんと夢中で写真やムービーをたくさん撮った。



写真 1 朱色が鮮やかな首里城



写真 2 砂浜で見つけた赤ちゃんヤドカリ

5. 観光地巡りと農耕・飲み物の違い

2日目はまずホテルから15分ほどの場所にある万座毛に向かった。私はこの日まで万座毛はあの有名な象の形に見える岩場の事かと思っていたが、それだけではなく、その岩場が臨める場所一体が万座毛だった。一見すると広い野原だが、有機珊瑚礁で出来ておりかつての琉球国王が「万人が座るのに足りる」と言った事から万座毛と名付けられたそうだ。昔の人は畑仕事が終わると万座毛でモーアシービー(歌ったり踊ったりする様)をしながら仕事の疲れを癒やしていた。今は景勝地として国内外からたくさんの観光客が訪れる場所となっているが、私たちが訪れた時には雨風が強かったため、ゆっくり景色を眺める余裕が無かった。次に訪れる時には晴れて綺麗な景色を眺めたいと思しながら万座毛を後にした。

万座毛から次の目的地、美ら海水族館へ向かう途中海岸沿いにたくさんの木が植えられているのが目にとまった。防風林として松が植えられている場所はよくあるが、沖縄の海岸には琉球松やアダンの木が植えられている。アダンの木の緑が白い砂浜に良く映えていた。

車外には他にもサトウキビ畑やウコン畑を見ることができた。その途中田んぼを見かけた。沖縄本島でお米を栽培している農家は少ないらしく、珍しいそうだ。沖縄県で米栽培に力を入れているのは石垣島で、全国で一番早く1月に田植えが行われる。石垣島で採れたお米は沖縄本島の人々に広く愛されているそうだ。

沖縄についてからシーサーやサトウキビ畑の他によく見かけたのがさんぴん茶だ。ジャスミン茶の事を沖縄の言葉でさんぴん茶と呼ぶ。自動販売機には必ず入っているし、コンビニにももちろんある。本当に至る所にあるので不思議だったが、答えは沖縄の水にあった。

沖縄の水は硬水で、緑茶を美味しく飲むのには適さない為、硬水でも美味しく飲めるさんぴん茶が主に飲まれるようになったそうだ。



写真3 象の形に似ている有機珊瑚礁・万座毛

6. 美ら海水族館・食事・散歩

ガイドさんから様々な沖縄豆知識を教えてもらっているうちに美ら海水族館に到着した。入ってすぐにヒトデやナマコと触れ合える水槽があり、子ども達に混ざりながら触ってみた。初めて触ったナマコは想像以上に柔らかく、普通に掴んでいたら握り潰してしまいそうで怖かったので早々に離れた。ヒトデは固くて岩のようだった。

次の水槽を見学していた時、個人的に嬉しい瞬間が訪れた。岩陰に隠れていたウミガメが水槽の上の方に向かって泳ぎ始めたのだ。まだ少し体が小さいそのウミガメが楽しそうに泳いでいる姿は可愛らしく、ずっと眺めていたかった。

深海の生物やクラゲなどの水槽も眺めながら順路を進んで行くと、ひときわ大きな水槽がある空間に出た。この水族館のシンボルであるジンベエザメが泳いでいる大水槽だ。ジンベエザメは2匹おり、それぞれ悠々と回遊していた。他にもマンタやエイなどもたくさん泳いでいたのだが、カツオも一緒に泳いでいて驚いた。

館内を巡り、外に出てマナティー館へ向かった。マナティーは4頭おり、それぞれ仕切られた空間にいた。まず目に付いたのはマナティーのひれの形だった。イルカやジュゴンのような三角形の形のひれでは無く、丸いしゃもじのような形だった。マナティー達は活発に泳ぐというよりは水中で静かに漂っていたが、その中で1頭だけくると回転しながら泳いでいる子がいた。そのまま水槽の外にいる私達に向かって泳いでくる姿はとても愛らしかった。

最後にイルカのショーが行われているオキちゃん劇場へと向かったが、すでに満席で立ち見の人もいたので少し離れた所からショーを楽しんだ。イルカたちが一斉にジャンプを披露した時に一番の歓声が起こった。



写真4 悠々と泳ぐウミガメ

美ら海水族館を後にし、昼食を取りにオリオンビールの工場へ向かった。ここで沖縄のブランド豚「アグー豚」の定食を食べることができた。アグー豚は脂身が多かったが食べてみるとむつこい感じもなく、甘みがありとても美味しかった。定食についていたお吸い物の中には海ぶどうが入っていてあっさりしたお吸い物に海ぶどうの塩気がアクセントになっていてこちらも美味しかった。

その後古宇利浜やTギャラリア沖縄などに立ち寄り、夕方にはホテルに到着した。2日目のホテルは国際通りに面しており、人通りも多かった。

夕食はホテル近くのステーキハウスでロブスターとステーキのセットを堪能した。ロブスターを食べるのは初めてだった上、海鮮系が少し苦手だったこともあり身構えていたが食べてみると身が肉厚で食感がとてもしっかりしていた。付いていたタルタルソースとの相性も抜群でとても美味しかった。

夕食後、国際通りを散策した。夜の方が活気があり賑やかだった。商店街もいくつかあり、そちらにも足を伸ばしてみた。少し狭い通りにお土産屋さんや居酒屋があり、居酒屋では店の外にテーブルと椅子を出して飲食を楽しんでいた。何となくお酒を楽しんでる雰囲気が高知と似ているなど思いながらホテルへと戻った。

7. 玉泉洞・記念撮影・ショーを経て帰路に

最終日、小雨が降るなか南城市にある「おきなわワールド」へ向かった。ここには天然記念物の鍾乳洞・玉泉洞がある。高知県にも龍河洞があるのでこの鍾乳洞はどんな場所なのか楽しみにしていた。中に入ってまず驚いたのは空間の広さと鍾乳石の数だ。様々な形の鍾乳石が四方にあり、30万年という気の遠くなるような時間をかけて造られているその空間にまだ数十年しか生きていない自分がいるのが不思議だった。

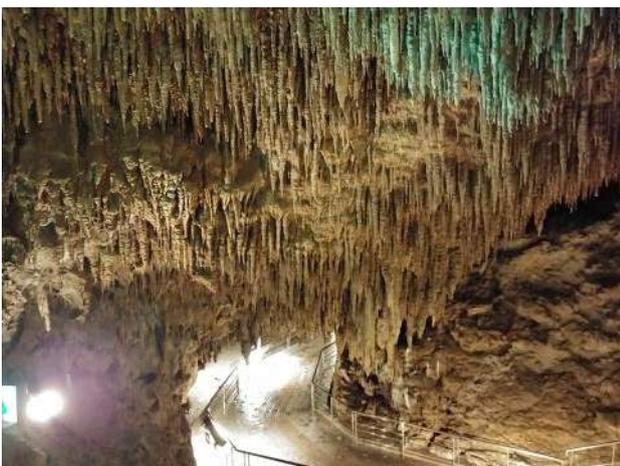


写真5 玉泉洞内には100万本以上の鍾乳石がある

約20分かけて出口へ向かい、スーパーエイサーショーが行われる広場へ向かった。到着した広場横に白へびと記念撮影できるコーナーがあった。白へびは財運を司る弁財天の化身とされており、金運の象徴となっているそう。ショーまで時間に余裕があったのと、幸運にあやかりたかった私は澤田さんと一緒に記念撮影をすることにした。職員さんにその日の担当白へび、サンゴくんを首にかけてもらった。初めて触る白へびは少し冷たく障り心地はツルツルしていた。サンゴくんはとても大人しくお利口だったが、へびの習性なのか撮影が終わる頃にはしっぽを私達の体に巻き付けていた。

撮影が終わったタイミングでスーパーエイサーショーの時間となった。間近で本場のエイサーを見るのは初めてだったので、ワクワクしていた。その日の舞台に出てきた踊り子は皆女性だったが、重そうなエイサー太鼓を軽々と扱いながら踊っていて、女性でもこんなにダイナミックな演舞ができるのかと感動した。20分ほどでショーは終了し、高揚した気分のまま那覇空港へと向かった。

8. おわりに

滞在期間中は期待していた青い空は現れなかったが、美味しい食べ物を食べ、可愛い生き物を見ることができたおかげで天候は気に留める必要がない充実した3日間だった。

また、一度訪れていた事もあり事前知識をあまり入れずに出発したが同行してくれていたガイドさんの説明が分かりやすく、沖縄の新たな知識を得る事ができ、良い観光ができた。

今回は海に入ることができなかったのですが、次回訪れる際はスキューバダイビングを体験したり、宮古島や石垣島などの離島にも行ってみたいと感じた沖縄の旅だった。



写真6 とても大人しかった白へび・サンゴくん

初めての沖縄

設計部 防災まちづくり課 課長
長崎 悟史 (2001年入社)

1. はじめに

今回の社員旅行は、最終的にシンガポールか沖縄の2択であった。昨年度のヨーロッパ旅行で長時間の飛行機はコリゴリであったため、迷わず沖縄を選択した。といっても私にとって沖縄は初めてであり、大いに期待してこの旅行に臨んだ。

2. 初日（移動、首里城見学）

初日は、会社から松山空港までバスで行き、松山から沖縄へと渡った。空港では、高級そうな大きな弁当が配られたが、まだ昼ご飯には早い時間であったため、飛行機内で食べることにし、浮かれたおじさんたちとまったり時間を過ごした。

機内で弁当を完食し2時間ほどで沖縄に到着した。沖縄の天気は曇りで、気温は高知と同じぐらいであったが、少し湿気を感じた。

到着後すぐに世界遺産である首里城公園に向かった。2000円札のモデルにもなっている首里城は、目が覚めるような鮮やかさで、美しい朱色の建物であった。なお、今では全く見かけなくなった2000円札であるが、沖縄では普通に使用されており、なんとATMでは2000円札優先で出金する機能もあるそうだ。



写真1 浮かれたおじさん2人



写真2 紅芋のスープ



写真3 メインディッシュ

初日の観光は首里城公園のみで、バスで宿泊先である恩納村の「ホテルモントレ沖縄」に向かった。到着後、夕食まで2時間ほどあったので、海を見わたせるベランダでリラックスした後、10分ほどであったがホテルのプールで軽く泳ぐことができた。

夕食は上品なコース料理が用意されていた。ところどころにゴーヤや紅芋などの沖縄名物も使われており、多様な料理をゆっくりと楽しむことが出来た。

3. 2日目（万座毛・美ら海水族館など）

2日目のはじめは、万座毛からの景色を眺めた。あいにくの天気で足早に見学しバスに戻った。たしかにゾウの鼻のように見えたが、雨のせいで感動は薄かった。

次は美ら海水族館を見学した。旅好きが選ぶ水族館ランキングで1位の水族館である。一番印象深かったのが、ジンベエザメの入った巨大水槽である。水槽内をジンベエザメがゆっくり泳ぐ姿は圧巻で、しばらく時間を忘れ眺めていた。水槽内はジンベエザメの他にも様々な種類の魚がおり、水族館ではここにしかないブラックマンタも見ることができた。写真4は、巨大水槽前はかなり粘って2匹のジンベエザメを激写したものである。



写真4 2匹のジンベエザメ



写真5 ロブスターとステーキ

巨大水槽で時間を忘れていたため、オキちゃん劇場でのイルカショーへは開始時間のぎりぎりになった。満員御礼で立ち見であったが、イルカたちのダイナミックなショーで楽しい時間を過ごせた。何ちゃんか忘れたが、ひときわ大きなイルカがおり、飼育員とのコントのようなやりとりが印象的であった。

その後、「オリオンビール園」で沖縄名物のアグー豚とオリオンビールによる昼食を楽しんだ。

2日目の宿泊ホテルは、前日に比べややレベルダウンといった感じであったが、目の前が国際通りで沖縄の街を楽しむには立地的に最高の場所であった。

国際通りは、お土産屋が多く競争が激しいのか2割、3割引などディスカウントしている店も多かった。

夕食は、みんなで「ステーキハウス 88」で楽しくいただき、その後は沖縄の夜の街の散策へ繰り出した。

4. 最終日（おきなわワールド）

最終日は、おきなわワールドで玉泉洞(ぎょくせんどう)を見学した。

玉泉洞は鍾乳洞で高知の龍河洞とは違い、生暖かい空気が流れていた。通路は広く見学しやすかったが、ところどころ通路のために鍾乳洞を削っていたところが少し残念な感じがした。

その後は高知に戻り、親睦会副会長の伊藤氏による「家に帰るまでが社員旅行なので・・・」というすばらしい締めめの挨拶で今回の旅行は終わりを告げた。

5. さいごに

今回初めての沖縄旅行ということもあり、世界遺産の首里城や各地の観光は大いに楽しむことができた。ただ一つ残念であったのは天気である。次回は、梅雨時期以外に子供たちも一緒に家族で訪れたいと感じているところである。また、普段接することの少ない社員との交流もできたことをうれしく思う。



写真6 鍾乳洞

沖縄の風土

設計部 取締役部長
松本 洋一 (1994年入社)

1. はじめに

今回の社員研修旅行では、第3班の沖縄研修に参加した。沖縄は、これまでも研修候補地として挙がっていたが、梅雨時期と重なることもあって実現しなかった。プライベートも含めて初めての沖縄訪問は、望外の晴天に恵まれ有意義な研修となった。2泊3日の駆け足であったが、肌で感じた沖縄の風土について綴る。

2. 気候

沖縄の気候区分は亜熱帯海洋性気候に属し高知より約1ヶ月早く梅雨入りする。令和元年度も5月に入って既に沖縄県与那国島、鹿児島県屋久島で記録的な豪雨に見舞われた。屋久島ではツアー登山者など300名以上が孤立するなど天候への不安を抱えながら出発を迎えた。

運良く我々の研修期間中、沖縄地方は高気圧に覆われ好天に恵まれた。3日間の最高気温は29度程度で高知とさほど変わらないが、最低気温は20度を越え気候差を感じた。沖縄では3月末から海開きが行われており、ホテルモントレ沖縄前に広がるタイガービーチでは海水浴を楽しめた。水温は十分に温かい。観光中も日差しは厳しく暑いが適度な風が吹いて私には快適に感じられた。



写真1 青空と美しい海岸をバックに（右側は筆者）



写真2 一足早い海水浴を楽しむ社員

3. 地形・地質と景観

沖縄沖の琉球海溝では、フィリピン海プレートがユーラシアプレートに潜り込んでいる。南海トラフと同様に地震による津波が想定され、平成27年3月に沖縄県が最大クラスの津波による浸水想定を公表している。これによれば那覇市沿岸域においても浸水深5mを越える津波が想定されている。市内通過中にも浸水想定を示す看板が見られた。

沖縄本島の地形は北部と南部で大きく異なっている。北部は主に海洋プレートの堆積物、いわゆる付加体によって形成され山地が続いている。今回訪れた中南部は主に珊瑚礁を起源とする琉球石灰岩から形成されている。首里城から望む遠景は標高が低いなだらかな丘陵地が続いていた。

沿岸部の岩礁帯では、石灰岩が波浪に浸食されたノッチと呼ばれる独特の地形が目立つ。キノコ状や動物にも見える奇岩を数多く見ることができた。柔らかい石灰岩は加工が容易なため、石垣等に利用されている。首里城の石垣は曲線や目地の緻密さに精巧な技術が伺える。

首里城に代表される赤い瓦屋根は、赤瓦と漆喰で作られている。赤瓦はクチャと呼ばれる地域特有の泥岩が材料である。台風対策として継ぎ目が漆喰で固められている。

建築物は民家も含めて鉄筋コンクリート造が多数を占め木造建物はほとんど見られない。これも台風対策のためである。

沖縄独特と感じる景観は、地域特有の地質や気象条件に巧みに適応する知恵の産物であることが理解できる。

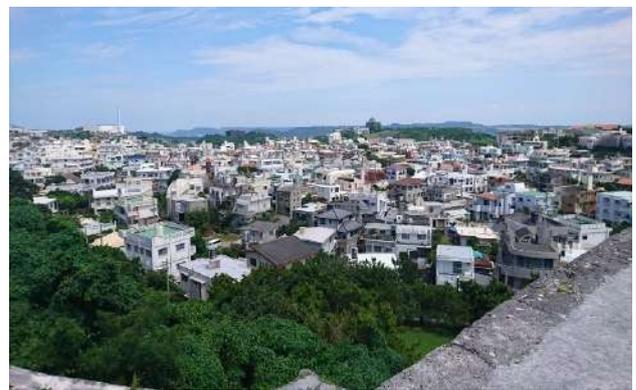


写真3 鉄筋コンクリート造建築物が立ち並ぶ那覇市街地



写真4 赤瓦と漆喰が特徴的な首里城公園の建築物



写真5 石灰石を巧みに加工した首里城壁



写真6 ノッチが発達した奇岩

4. 観光地巡り

今回訪れた主な観光地は、首里城公園、海洋博公園と美ら海水族館、古宇利島、おきなわワールドである。梅雨のため一般観光客は少ない時期とのことであったが、修学旅行の生徒とインバウンド観光客で観光地は賑わっていた。ルートを縦断する沖縄自動車道の恩恵で適度な移動時間で快適に観光地を巡ることができた。

首里城公園と海洋博公園は、国営沖縄記念公園として管理されている。首里城は、中国と日本の築城文化が融合した独特の建築様式等の高い歴史的文化的価値が評価され、世界文化遺産に登録されている。正殿をはじめとする赤屋根の建築物と独特の石積みで構成される城壁が異国情緒溢れる景観を形成している。那覇市内が一望できる丘からの眺望も素晴らしい。

海洋博公園は、昭和50年に開催された沖縄国際海洋博覧会の跡地に設置されている。77ヘクタールの広大な敷地は、歴史・文化エリア、花・緑のエリア、海のエリアに分けられ、郷土村、植物園、海洋文化館、プラネタリウム等の施設が立地している。なかでも美ら海水族館は年間利用者数が300万人を越える超人気施設である。平成29年度の利用者数を調べてみると高知県内の主要観光施設(66施設)の年間利用者数を水族館1施設で上回っている。沖縄の観光地としてのポテンシャルを実感する。ジンベエザメが回遊する「黒潮の海」水槽は水族館の最大の見所であり迫力がある。

古宇利島と屋我地島を結ぶ全長1960mの古宇利大橋は、徒歩で渡ることができた。エメラルドブルーの海を

横切る直線の橋はまさに絶景と呼ぶにふさわしい。

沖縄ワールドでは玉泉洞の鍾乳石が印象的であった。大規模な鍾乳洞は長い年月によって形成された石灰石の島であることをあらためて実感できる。

2日目の夜は、高知工科大学社会人コースの同級生と再会し泡盛と地魚を肴に楽しい時間を過ごすことができた。

5. おわりに

初めて訪れた沖縄は、天候に恵まれてどこを切り取っても美しい景色を楽しめ、その風土を垣間見ることができた。

今回は、基地や戦禍の痕跡など沖縄が抱える課題の部分を実感することはできなかった。またの機会があれば是非訪れてみたい。



写真7 絶景の古宇利大橋を渡る兵頭夫妻



写真8 ジンベエザメが回遊する圧巻の黒潮水槽



写真9 泡盛と地魚を楽しむ

リゾート地・沖縄の今を知る

設計部 防災まちづくり課
有澤 芳則 (2015年入社)

1. はじめに

今年の研修旅行は、第3次産業、特に観光産業が主力の沖縄県を選択した。2泊3日という短い期間ではあるが、「持続的・安定的かつ質の高い世界水準のリゾート地」を目指す沖縄を訪れ、見聞きし感じたことを述べる。

2. 首里城公園

首里城公園は、世界文化遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」に登録されている9ヶ所の内、首里城跡、園比屋武御嶽石門、玉陵がある。なお、現在修復を行っている首里城は、世界文化遺産に含まれない。

首里城公園周辺は、那覇市都市景観条例に含まれている。東のアザナと呼ばれる物見台（標高約140m）から、城外の町や正殿裏・御内原一帯を一望することができる。公園内のガジュマル、オオバギ、アカギ等の樹木の緑色、沖縄赤瓦の赤色、白色のファサード、空の青色が一点物の絵画のように思えた。

3. 恩納村

(1) 観光リゾート地の景観調和

恩納村は風光明媚な海岸線や文化財が多数あるため、リゾートホテルの開発に適している。都市計画区域外であった恩納村は、村全域とイノー（礁池）と呼ばれるサンゴ礁に囲まれた浅い緩やかな海を含む範囲を景観計画区域に指定し、6つの土地利用区分別の方針によって景観の維持を図っている。

宿泊先であるホテル周辺の建物は、白色または明度の明るい色が使用されていた。しかし、コンビニやガソリンスタンド等の屋外広告物は、景観に配慮できているとは言いがたい。今年の2月にリゾートホテル「フォーシーズンズリゾートアンドプライベートレジデンス沖縄」の開発計画が発表されていることから、恩納村の景観が今後どのように変貌を遂げるか注目したい。

(2) リゾート地の防災

ツアーガイドの説明によると、沖縄は多数の風水害に見舞われる。そのため、全体的にコンクリート構造の建物が増えているようだ。ホテル近くにあった指定緊急避難場所もコンクリート構造で建てられていた。しかし、海拔が2.0mのところにあるため、津波に対する防災意識はやや低いのではないかと感じた。



写真1 東のアザナからの景色



写真2 眺望景色



写真3 主張するコンビニ



写真4 海拔2.0mの指定緊急避難場所

4. 海洋博公園

沖縄美ら海水族館は、国営の海洋博公園内にある。

「自然豊かな沖縄の海をそのまま展示する」というコンセプトのもと、沖縄の海との出会いをテーマに南西諸島・黒海の海に生きる多種多様な水圏の生き物を展示している。

巨大パノラマを連想させる「黒潮の海」水槽を優雅に泳ぐジンベエザメ、ナンヨウマンタをはじめとした多種多様な魚たちの姿は、天井から降り注ぐ光も相まって幻想的なシーンを上映しているかのようであった。水上デッキでは、「黒潮の海」水槽に使用しているアクリルガラスの断面が展示されていた。



写真5 60cmの厚み

5. 古宇利大橋

古宇利大橋は、2005年に開通した名護市と屋我地島を結ぶ全長1960mの1等橋で、約270億円かけ作られている。晴れた日に古宇利大橋から見る景色は絶景だと言うツアーガイドの勧めに従い、歩いて橋を渡った。太陽の日差しは強かったが、橋の両側に広がるエメラルドグリーン的大海はとても綺麗であった。内地の開発による赤土の流入や、埋め立て等による影響がなければもっと透明な海だとツアーガイドが述べていたが、現状でも十分綺麗だと思う。



写真6 緑ヶ丘公園エントランススペース公衆便所

6. 那覇市探索

(1) 2016年グッドデザイン賞

緑ヶ丘公園エントランススペース公衆便所は、国際通り周辺地区活性化の一環として、地域に憩いの場を作ることとして作られた。白で統一されたフレームのようなオブジェは、建物が軒連なっているかのように見える。また、フレーム内には椅子やテーブル、ペンダントライトのようなものがあり、カフェを連想させるようなデザインだった。

(2) 壺屋やむちん通り

壺屋地区の顔ともいえる壺屋やむちん通りは、土木学会デザイン賞2003を受賞している。「あたかも昔からそこにあったかのように」という思想の元、年月を経て美しく古びていくよう琉球石灰岩を舗道や路盤に多用している。周辺の建物は、路面の白さに合わせファサードを白っぽくし、見事な景観を作り出していた。



写真7 壺屋やむちん通り（メイン通り）

7. おわりに

今回の研修旅行は天気にも恵まれ、沖縄の自然豊かな景色を眺望することができた。街並みや景観は那覇市や恩納村を中心に触れることができた。

バス移動中に多数見かけた著名地点の案内看板は、他県と異なっていたため目を引いた。ピクトグラム自体は標準ピクトグラムで構成されているのだが、背景の下半分が緑色になっていた。細かな点ではあるが、観光を主力産業としていくには、こういった目を引くものが必要だと思った。



写真8 著名地点の案内看板

社員旅行(沖縄 2泊3日)

設計部 防災まちづくり課
森本 真由子 (2019年入社)

1. はじめに

入社して初めての社員旅行である。前職までは出張も含めて業務上の遠出は一人で出向くことが常だったため、少し緊張して前日はよく眠れなかった。今回のレポートでは、印象に残った古宇利橋、ワルミ大橋、沖縄美ら海水族館の巨大水槽、国際通りに注目して感想を記述する。

2. 古宇利橋

古宇利大橋は、今帰仁村古宇利島と名護市屋我地島を結ぶ橋梁であり、橋長が1960mに及び、日本国内で通行料を要しない橋としては伊良部大橋に次ぐ2番目に長さである。2005年に開通して今では人気の観光スポットとなっている。橋をバスで渡るか、徒歩で渡るか選択できたが、せっかくなので、徒歩で渡ることにした。最初は暑さを懸念していたが、心地よい風が吹いていたため、想像していたより気持ちよく歩くことができた。また、乗り物での移動が続いていたため、ちょうどよい運動になった。

ただ、日頃の運動不足も相まって、3km程度に感じた。橋を渡っている最中、橋上灯の設置がなく眺めがとてもよかったことが印象的であった。地中埋込型のフットライトが歩道に埋め込まれており、車道には反射板の設置がメインであった。調べてみると、古宇利島には街灯が少ないため、夜になると辺りは暗く空には美しい星空が広がり、星空観測の場所としても有名だそうだ。近年、橋梁の夜間演出として、ライトアップが注目されているが、古宇利橋には橋上灯が無いことで、日中は海や島の眺望を遮ることなく、また、夜間は星空の美しさをより楽しめるため、地域の景観に配慮した計画だと感じた。



写真1 古宇利橋と古宇利島



写真2 ワルミ大橋からの眺め

3. ワルミ大橋

名護市と本部半島の境目にあたるこの場所には高さ30m以上の「ワルミ海峡」という断崖絶壁があるため、かつては絶対に通行が不可能な場所であったが、ワルミ大橋が開通されたことで通行可能になった。

実際に橋から見る眺めは、エメラルドグリーン色（バスガイドの方の表現では「バスクリン色」）の海に浮かぶ古宇利島や屋我地島がとても美しかった。

現地に着く前は、橋梁の見学の想像が出来ていなかったが、わざわざこの眺めを見るために、遠くから訪れる観光客がいることに納得した。旅行後に調べると、この付近の海は砂地になっているため、海底が太陽光を反射し、海面が青ではなくエメラルドグリーンに輝くそうだ。

また、ワルミ大橋そのものも卓越した技術で作られていることから、建造物ファンの間でも一度は見たい橋として知られている。

地元の人々の暮らしを便利にしたワルミ大橋だが、こちらも開通すると観光スポットとして人気になったそうである。地元の利便性を向上させ、地元ならではの観光資源として旅行者の誘致を活発にした成功例だと思う。

4. 沖縄美ら海水族館

旅行前はイルカのショーを楽しみにしていたが、最も印象に残ったのは、ジンベエザメやナンヨウマンタの泳ぐ世界最大級の水槽「黒潮の海」であった。

世界最大の魚類であるジンベエザメの全身を柱の無い1枚のパネルで見られるため、大変な迫力である。水槽の上部から射してくる光も幻想的であった。この光は自然光を利用したもので、当日は天候に恵まれたため、とても美しい眺めであった。

水槽の巨大な窓は、高さ8.2m、幅22.5m、厚さ60cmで、7500tの水量をせき止めている。アクリルの実物はとても厚いが、レンズ効果はなく水槽内の魚は、ほぼ実物大に魚が見られるそうだ。水槽付近に厚さ60cmのアクリ

ル柱が展示してあった。

この製品は1枚の亚克力パネルとして、また水族館の窓として、世界最大級であることから、施工当時の現場搬入計画や施工工程等、ドキュメンタリー映像があれば見てみたいと思った。



写真3 イルカショー

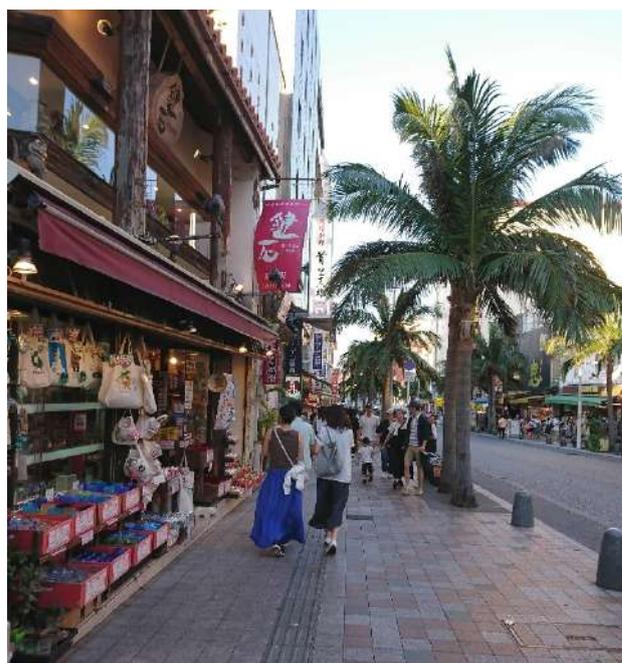


写真6 国際通りの歩道のブロック、植栽



写真4 巨大水槽の厚さ60cmの亚克力



写真5 自然光が降り注ぐ巨大水槽で泳ぐジンベエザメ

5. 国際通り

2日目の宿泊先が国際通りに面していたため、夕食後に散策してみた。電柱が地中化されていることにより、植栽が植わっていても十分な幅員があることから歩きやすいと感じた。異国情緒あふれる植栽と夜22時頃まで営業している商店があるため、観光客が夜遅くまで行き来しており、平日よりも関わらず、活気ある通りであった。

歩道はベースを白色、模様を赤色、視覚障害者用の誘導ブロックは緑色で構成されていたが、実際に見た感想としては、誘導ブロックの視認性に疑問があった。

週末にはトランジットモールの実施やエイサー踊り等、歩道を一体利用するイベントがあるらしいので、機会があれば、その雰囲気味わってみたいと思った。

6. おわりに

今回の旅行では、初めて訪れる場所で、その地域性を活かした計画に触れることが出来たように思う。

また、業務上、ゆっくりと会話する機会が少ない方と交流することが出来て有意義な旅行であった。

旅行後も見てきたことを少しでも業務に活かせるよう心掛けたい。

美ら海まぶしい沖縄の旅

設計部 地盤防災課
藤平 美香 (2016年入社)

1. はじめに

5月23日から2泊3日で行った研修旅行を終えた。

青い海と三線が響く島唄や賑やかにエイサーを踊る姿、ゴーヤチャンプル、サトウキビ畑、シーサー……。一度も訪れたことのない場所なのに、地理に疎い私でも色々と目に浮かぶ。そんな特色がある沖縄に行くことができた。

2. 沖縄の住宅

まず、沖縄に着いて、バスの道中から見える建物が、コンクリート造りばかりなのが印象的であった。バスガイドさんが、コンクリートは暑い、台風が多いため、米軍基地を参考に建てられていると教えてくれた。

また、どこの屋上にも給水タンクが設置されていて、見慣れない新鮮な光景だった。昔から水不足に悩まされているからだそうである。給水タンクは丸出しのところも多いが、コンクリートなどで細工して囲っている建物もあった。センスの良い囲いを探すのも楽しむことができた。

沖縄らしく所々、屋根や門まわりにシーサーが居座っており、癒やされる光景であった。

3. 朱色に染まった首里城

1日目の観光は、首里城である。予習せずに行ったため、首里城の知識がなくありがたみが半減してしまった。反省である。

しかし、鮮やかな朱色の佇まいは圧巻であった。復元された建物だそうだが、国王や王妃らが生活を営んでいたと想像すると重厚感を増した。天井が低く圧迫もあり、夜は少し不気味そうである。やむを得ないのだろうが、通路や階段、防護柵など近代的に整備され過ぎた構造物が趣に水を差し残念に感じた。



写真1 朱色の世界首里城の御庭にて

4. 光と共演の美ら海水族館

2日目に行った美ら海水族館は、私がこの旅行で一番楽しみにしていた場所である。

バスから降りて見えた広く開けた美しい景色と、歩道橋での気持ち良い風が、水族館への期待を益々高めた。

館内に入ると、海の生き物に触ることができるコーナーがあり、大きなヒトデとナマコを触ってみた。ヒトデは堅く、ナマコはプニプニとし癖になる触り心地であった。

じつと人間に触られるその様は健気であった。

少し進むと、目の前にとってもキラキラした水槽が飛び込んできた。沖縄の海らしい色とりどりの魚たちが、光のシャワーの中を進んでいく様子に感嘆の声がもれた。同じ水槽だが、角を曲がるたび現れる景色に目を奪われた。

奥には、雑誌やテレビなどで紹介される、これぞ「美ら海水族館」である巨大な水槽が現れた。ジンベエザメやマンタが余裕で雄大に泳ぐ様子は、さすがの大迫力だった。少し離れて見ると、水槽内を眺める人間の群れが影となり、それがまた幻想的であった。水槽内のキラキラ輝く光は、照明による演出ではなく、自然光だと聞いて感激が増した。晴れの天気にも恵まれラッキーである。

展示の最後にはショッキングな写真が展示されていた。胃の中にプラゴミが詰まり死んだ亀である。海の生き物たちが餌と間違えるプラゴミは消化することが出来ない。これは他でもない人間の仕業である。

屋外で、イルカのショーを楽しみ水族館を後にした。

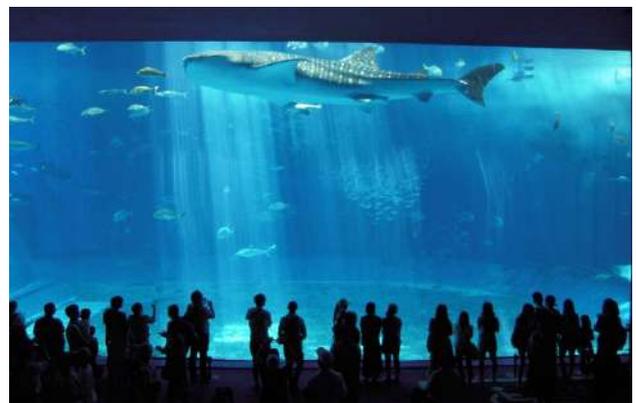


写真2 光り輝く大水槽(美ら海水族館)



写真3 プラゴミを食べた亀(美ら海水族館)

5. 美ら海に架かる古宇利大橋

昼食後はドライブコースだというワルミ大橋と古宇利大橋へと向かった。

ワルミ大橋は本島と屋我地島を結ぶ300m余りの橋である。橋を渡りバスから降りると眼下にワルミ海峡が広がり次に行く古宇利大橋が奥に見えた。青い空とコバルトブルーの海と木々の緑が広がり絶景であった。空気も澄んでいて心が洗われるようだった。

続いて先ほど見えていた古宇利大橋へ向かった。古宇利大橋は古宇利島と屋我地島を結ぶ約2kmの橋である。本島周辺で最も長い橋だそうだ。

バスから降りて橋に近づくと、海が近くに見えて先ほどとはまた違った絶景である。エメラルドグリーン広がる海の上に架かるこの橋を歩いて渡ることができた。橋の上から海をのぞくと海底が見え、澄んだ海水がゆらゆらと揺れキラキラと輝いていた。亀や魚の群れが形を変えながら泳ぐ様子を見ることもでき癒やされた。

この橋は、何だかすっきりしているなど感じていたら、照明が足下に埋められていた。後で調べてみると特別鳥獣保護区に指定されているため鳥の渡りに配慮したためだそうだ。太陽光とのことである。また、島には街灯がないため星空がとてもきれに見えるそうだ。橋から見る夕日もとても美しいそうなので夕方から来るのも良さそうだ。

少し長めの散歩だったが気持ちよく歩いた後、土産店へ寄り道をしながらホテルに向かった。



写真4 ワタミ大橋から古宇利大橋を望む



写真5 歩いて渡った古宇利大橋

6. 自然の神秘感じる玉泉洞

最終日3日目は、おきなわワールドに行った。そこで鍾乳洞の玉泉洞に入った。鍾乳洞と言えば涼しいイメージだが、ここは湿気がありじわっと暑く、長時間いると息苦しくなってくる。上下からなる無数の鍾乳石の柱は圧巻であり、神秘的であった。

少し長く感じた洞内公開区間の道のりは、洞内全体の1/5にも満たないようで、自然の壮大さを感じられた。

7. 沖縄での「食」

バスガイドさんの話では、沖縄では山羊の肉を食べるのがポピュラーだそうである。今回は食する機会はなかったが、様々な沖縄の食に出会うことが出来た。

まず口にしたのは「さんぴん茶」である。沖縄はお茶と言えばジャスミンで作るさっぱりとしたこのお茶が主流で、自動販売機には必ず並んでいた。

ホテルの朝のバイキングは2日とも様々な沖縄の食が並んでいた。ひと通りお皿に取り沖縄を堪能した。また、最後に空港で、沖縄そばを食べることが出来た。こってりしたイメージがあったが、意外にあっさりで食べやすかった。同じ店で食べた海ぶどうもさっぱりしていて、人が注文したものだが箸が進んだ。

以前は珍しかった沖縄料理も現在は身近となり親しみあるモノも多かった。だが、現地で食べていると思うとなお一層おいしく感じられた。

8. おわりに

今回、駐車場に並んでいたバスや車の全てが沖縄ナンバーだったのが、島国を物語っていて印象的だった。

旅の最後には、飛行機の窓から感動的に美しい沖縄の海が離れていく様を眺めることができた。

とにかく天気に恵まれた3日間だった。この時期に、こんなに天気の良いのは珍しいそうである。修学旅行で、全日程が雨の沖縄に行った娘にうらやましがられた。

今は、連れ帰った笑顔のシーサーが、仕事机の上で見守ってくれている。

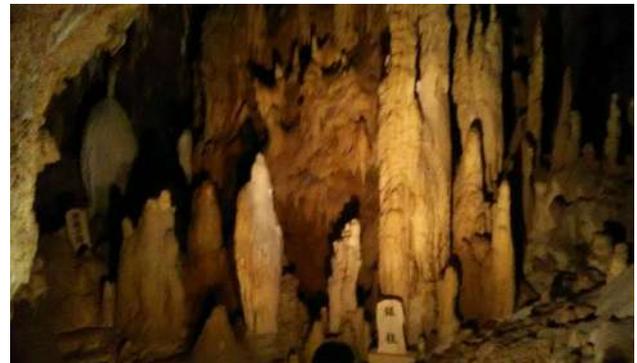


写真6 無数の鍾乳石が立つ玉泉洞

沖繩の海と橋

設計部 橋梁構造課 課長補佐
兵頭 学 (2009年入社)

1. はじめに

平成31年度(令和元年度)の社員旅行として沖繩を訪れた。沖繩へ行くのは今回が初めてである。家族同伴が可能であったので妻と一緒に行くことにした。

本稿では、2泊3日の沖繩旅行で感動したことや気になった事柄を中心に記したいと思う。

2. 美ら海水族館

旅行2日目には、有名な「美ら海水族館」へ行った。

ここでは、なんと言っても巨大水槽で泳ぐジンベエザメを見ることができたのが良かった。水槽へ差し込む光は恐らく自然光だと思われるが、とても自然な光で、魚たちが実際の海の中で泳ぐ姿を見ているようでとてもきれいであった。

また、この水槽があるフロアは上階からスロープで降りていく構造となっていて、上階から水槽を望むことができる。そうすると、下の階で水槽を眺めている人たちのシルエットが水槽の存在感をより際立たせる。この水族館を設計した人は、多分こうした効果もイメージしてこのフロアを作ったのだろう。

施設を使う人たちも含めてデザインの一部にするような考え方は土木構造物ではなかなか見られないものだと思う。こうしたデザイン上の工夫もできるようになっていくと、より豊かな設計ができるのではないかと感じた。

3. 古宇利大橋

同じく2日目に古宇利大橋を訪れた。

古宇利大橋は、沖繩本島と離島である古宇利島(こうりじま)を結ぶ橋で、橋長が1960mの橋だ。調べても形式が分からなかったが、外観からはプレストレスト・コンクリート連続ラーメン箱桁橋であると思われる。これも本当か分からないが古宇利島の直径と同じ長さになっているそうだ。

橋を沖繩本島側から眺めると、青い海を跨がる橋の姿はとても美しく、沖繩ならではの橋の姿を見ることができた。第1班では残念なことに天候が悪く、きれいな海を見ることができなかったようだ。ガイドさんも梅雨時期にこれだけ晴れるのは、とても珍しいと話していた。

橋梁として気になったのは、高欄の途中に等間隔で石材のモチーフが設置されていたことだ。その上に番号がガムテープで貼ってあって、橋を歩いて進むにつれて番号が増えていく。

きちんと数えていないが、恐らく橋脚の位置にモチー

フを設置して、点検の時にそこに橋脚があることを示すものではないかと思う。橋面上からは橋脚の姿は全く見えないため良い工夫だと思った。ただ、橋脚の番号をガムテープで貼っているのは頂けない。現在施工中の高知南国道路でも橋脚に橋脚番号を書いた紙を貼り付けているが、景観のことを考えると、この番号もデザインの一部に取り込んでほしいところである。

また、海上の橋であるので当然のことながら腐食に強いアルミ製の高欄が使用されているのだが、アルミ製の高欄は鉄と接触させると自然電位の差によって、電位の低いアルミが錆びてしまう。この橋では、地覆内の鉄筋との接触を確実に防ぐために箱抜きがされており、箱抜き内にモルタルを充填して高欄を固定する方法を取っていた。高知県でも沿岸部などではアルミ製防護柵が広く採用されているが、こうした設置方法は見たことがないような気がする。施工誤差に影響されにくい良い方法だと思う。

その他に、橋長が長いために途中で標識が設置されているが、この標識が高欄に取り付くので、鉄製の取り付け金具とアルミ製の高欄の間にゴムを挟んで対応していた。これについては、あまり見栄えの良いものではなかった。それに標識側の材料は塩分にあまり強くないめっき処理がされていて、ちぐはぐな感じがした。

4. 玉泉洞

最終日の3日目に訪れた沖繩ワールドでは玉泉洞と呼ばれる鍾乳洞の中へ入ることができた。この鍾乳洞は、ものすごい量のつらら状の鍾乳石があって見応えのあるものであった。ところどころに水溜まりがあって、ライトアップのおかげもあるが、深い青色と鍾乳石のコントラストは美しかった。

ただ残念だったのは、洞窟の中を散策できるように通路が設置されているのだが、通路上の通行に支障になっている鍾乳石を人工的にバシバシと切断していたことだ。観光や安全のために仕方がないことかもしれないが、自ら価値を下げているようで、なんとも言えない気持ちになった。

香美市の龍河洞はもっときれいだという話を聞いたので是非行ってみたいと思う。

5. 終わりに

はじめての沖繩旅行は、バス移動が多かったのもあって、とてもゆったりとした行程で良いリフレッシュができた。もう少し時間があつたら、太平洋戦争関係の資料館なども行けると良かったかなと思う。また機会を見て、そういった沖繩にも触れてみたい。

最後になったが、今回の旅行でも親睦会長をはじめ、親睦会の若手社員が旅行会社との調整や旅行中のまとめ役など忙しい中を尽力して頂いた。無事何ごともなく旅行を終えられたのも皆様のおかげである。心からの感謝を申し上げる。



写真1 美ら海水族館(1)



写真2 美ら海水族館(2)



写真3 古宇利大橋(1)



写真4 古宇利大橋(2)

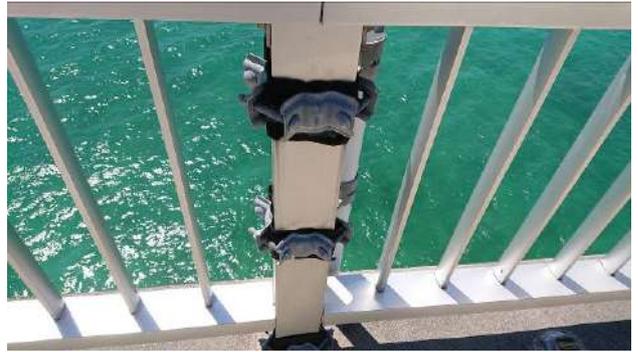


写真5 古宇利大橋(3)



写真6 古宇利大橋(4)



写真7 おきなわワールド(1)



写真8 おきなわワールド(2)

沖縄の海と橋

設計部 橋梁構造課 主任
中平 聖士 (2019年入社)

1. はじめに

研修旅行として沖縄を訪れた。これまで何度か沖縄を訪れる機会があったが、研修旅行のレポート作成は初めての経験である。どう書くべきか頭を悩ませながらの出発となった。旅行中に様々なテーマを考えてみたが、橋梁の点検を専門としている者として、沖縄の橋梁がどういった状況なのかは旅行前より興味があった為、橋を点検しながら気付いた事と旅行中に感じた事について記すことにした。

2. 那覇市付近の高速道路

沖縄に到着早々大きな上部工の下部を見る機会に恵まれた(写真1)。すぐ近くに海のある高速道路の橋梁である。塩害に余程気を使っているのか、鋼部材の塗装は真新しく定期的な塗り直しが行われているようである。下部から眺めた限りでは、防食機能の劣化はほとんど無いことが伺える。コンクリート部材にも保護剤が塗装されており維持管理に力を入れていることが伺えた。

3. ワルミ大橋

ワルミ大橋は2010年に開通した全長315mの上路式鉄筋コンクリートアーチ橋で海上に架けられている(写真2)。

路面点検のつもりで橋面や高欄等の付属物の確認を行ったが、高知県では良くある地覆の被り不足によるひびわれ・鉄筋露出が無く、非常にしっかりとコンクリートが打設されていた。



写真1 高速道路の橋梁

4. 古宇利大橋

古宇利大橋は、2005年に開通した沖縄本島と古宇利島を結ぶ全長1960mのプレストレスト・コンクリート8径間連続箱桁橋、プレストレスト・コンクリート4径間連続ラーメン箱桁橋である(写真3)。

この橋は海上に架けられており、沖縄には離島を繋ぐ橋が多いことが伺えた。

古宇利大橋は計画当時通常50年の目標耐用年数を100年と設定し直し作られており、様々な塩害対策が試みられているとのことであった。

実際に対策が施されている箇所を見てみると、塩分の付着面積を減らす効果を見込んで箱桁構造の部材側面に傾斜を付ける工夫がされていた。合理的な構造を採用していると感じた。

支承部を確認したところ開通から14年経過しているが腐食がとてもし少ない状態であった(写真4)。

金属部材ではAlMg(アルミマグネシウム合金)の溶射処理により耐久性が高められていることが解った。



写真2 ワルミ大橋



写真3 古宇利大橋



写真4 支承部



写真6 ホテルでの食事



写真5 上部工損傷状態

コンクリート部材では乾燥ひびわれも含めひびわれが驚く程に少ない(写真5)。部材にチョーキングの跡が残っていたので確認しやすかったが、主桁下面に数本確認できる程度である。ミニマムメンテナンス橋として講じられたエポキシ樹脂塗装のPC鋼材・鉄筋や高耐久コンクリートの使用といった数々の塩害対策が効力を発揮している。

5. 食事

今回の沖縄旅行では豪勢な食事になると前もってアナウンスがあったが、記憶に残る食事となった。

一日目の昼食はお弁当である。愛媛で作られたお弁当だからかみかん酢が使用されたマリネ等がある高級感のあるお弁当だった。少し量が多かったがなんとか完食した。

夕食は、ホテルのコース料理である。本格的なコース料理は初体験であり、食器の使用順等戸惑いながらの食事であった。どれも非常に美味しかったのだが、量が少し物足りなかった(写真6)。

夕食後、ホテル近くのステーキ店で食事をした。ここで食べたステーキは美味しかったのだが食べ過ぎで2日目以降体調を崩す原因となり、何事も程ほどにしておくべきという苦い教訓になった。

あまりにも食べ過ぎてしまい食後の散歩を行おうとホテル周辺を回ってみたが、ステーキ店がとにかく多く目についた。飲食店の4店に1店はステーキを出しているのではないと思うほど「ステーキ」の単語が目につく。あまりに多いため調べてみると、戦後の米国進駐により沖縄に米兵向けの歓楽街が発生し、米国の食文化であるステーキ店が多く営業され、それが戦後の沖縄返還により沖縄県民も利用できるようになったとのこと。また、最近まで沖縄限定で牛肉の関税が低く設定されており比較的安価にステーキを提供できた事もステーキ店が広く普及しているようである。

6. 終わりに

今回の旅行は驚くほど天候に恵まれ沖縄を存分に満喫することができた。

橋梁の見学では塩害対策の有効性を、損傷が発生しないように行われている塗装やコンクリート保護剤の定期的な塗り直しといった事前対策。これらの事から厳しい環境下における一番の対策は損傷が発生しないように未然に防ぐ事前対策ではないかと感じ取れた。

文化であれば「ステーキ」からふと思った疑問でさえ沖縄ならではの理由や事情があり、調べる楽しみを味わうことができた。普段ニュースで流れている沖縄と米軍基地の問題については見ることはできなかったが、米国からの影響は様々な所から見え沖縄と米国は密接な関係にあると思った。

自分はアイデアやひらめきは、同じ物を同じ場所から見続けるだけでは出にくいのではないかと考えている。高知では見られない物や状況を体験し、蓄積していくことで生まれるのではないかと思う。

次の機会には現地ならではの状況に触れ経験を蓄積し、今後の仕事に生かしていきたいと思う。

自然と生物にふれて思うこと

設計部 橋梁構造課
小笠原 明弘 (2017年入社)

1. はじめに

今回の旅行である沖縄は、私にとって2度目となる。1度目は幼いころであったため記憶はほぼ無く、とても新鮮な旅行となった。今回の旅行で最も楽しみにしていたのは美ら海水族館の見学だ。幼いころから水族館が好きで、大人になってからも興奮するものがある。そこで当レポートでは水族館をメインとした美しい生物や自然に触れて感じたことについて述べたいと思う。

2. 美ら海水族館の南国らしさ

入館してすぐのスペースには、珊瑚単体の展示コーナーがあった。大抵の水族館は熱帯魚などの展示に併せて珊瑚を導入しているイメージであったが、珊瑚単体を展示して、珊瑚礁の形成や生殖方法などを丁寧に説明している所からは、沖縄らしさを感じることが出来た。またレポートを書きながら気づいたのだがペンギンがいなかったのである。南国での飼育が困難なのか、南国らしさの演出のために涼しいイメージのペンギンを導入していないのかは分からないが、水族館にも地方色が現れるのだなと感じた。

3. 黒潮の海

美ら海水族館のメイン展示の一つが「黒潮の海」だ。この大水槽は容量が7,500 m³であり、それを支えるのは厚さ60cmの亚克力ガラスだ。この亚克力ガラスはレンズ効果が出にくい作りになっているようで、展示されている生物を実寸大に近いサイズで見ることが出来るようだ。見やすさへの工夫は、ガラス面だけではなくスロープ状の順路にも見られた。そうすることにより、より多くの人が水槽を見ることが出来るのだ。また壁にはホオジロザメの一枚皮などが展示されており、リアルな鮫肌や顔の恐ろしさを間近で見ることができ待ち時間も常に楽しむことが出来た。



写真1 珊瑚

大水槽の中でジンベエザメやナンヨウマンタといった大きな生物が悠々自適に泳ぐ様は迫力があつた。この水槽で一つ気になったことがある。それはエイの泳ぎ方についてだ。大水槽の中には数種類のエイが飼育されており、今までエイは左右対称に鰭をはためかせて泳ぐものだと思っていた。しかし、その中に左右交互に鰭を動かすエイがいたのだ。そういう種なのか、その個体がたまたまそういう泳ぎ方をしただけなのかは定かではない。旅行から戻って調べているのだが、有益な情報が得られないので今度メール等で水族館に問い合わせしてみようかと思う。

4. 世界三大サメ

美ら海水族館では世界三大サメである「ジンベエザメ(生体)」「ウバザメ(頭部ホルマリン漬け)」「メガマウスザメ(ホルマリン漬け)」を見学することが出来る。ジンベエザメが可愛らしいのに対し、他2種のサメの容姿は化け物じみたものであり、特にメガマウスザメの目は何度見ても目が合つてそうで恐ろしい。



写真2 黒潮の海



写真3 ジンベエザメ



写真4 ウバザメ



写真5 メガマウスザメ

これら三種は濾過摂食にて食事を行う。プランクトンのような小さな物を大量に食べ、何メートルにも成長するのだ。進化の過程で体を大きくすることを選んだのであろうが、プランクトンだけでそこまで大きくなるのは驚きが隠せないとともにうらやましさも感じる。

サメは種類が豊富で、生息地域や深度によって姿が全然異なるので面白い。特にメガマウスザメは深海ザメで目撃情報も少なく、まだまだ謎に包まれた生物だそうで、それらが徐々に解明されていくかもしれないと思うと心が躍る。

5. 海洋汚染問題

順路の最後には水族館からのメッセージが込められた展示となっており、それは海洋汚染についてであった。海洋生物の美しさや可愛らしさに浸らせた後に、ごみ問題の深刻さを伝える展示の順序は訴えかけるものがある。

内蔵に詰まったビニール袋や漁網に絡まるウミガメ、釣り針を飲み込んでしまった海鳥などの写真を見ると心が痛む。そうなった以上彼らに自力で取り除く事は不可能で、幸運にも獣医などに遭遇できないと溺死や窒息死、餓死などを待つほかないそうだ。



写真6 ゴミ

展示されているごみに表記された文字は日本語、英語、中国語、韓国語と多岐に渡り、もはやどこの国の責任だという話ではないことが伺える。

個人レベルで海を綺麗にすることは不可能なのかもしれないが、これ以上の汚染を止めることは出来るはずである。適切な分別や、ゴミ発生の抑制など出来る事から徹底していこうと思う。

6. さいごに

昨年のニュースで興味深かったものの中に、マイクロプラスチックに関するものがある。それはある予備研究に協力した人間の糞便から、マイクロプラスチックが検出されたというものであった。昔から問題視されていた海洋汚染が食物連鎖を経て人間の食卓にまで影響してきているのだ。人間の自然保護に対する考えの甘さが招いた結果であり自業自得と言われればそれまでなのかもしれない。しかし美しい自然、豊かな生態系を後世に伝えるのも、それらを破壊するのも同じ人間であろう。なので一人でも多く環境保全を意識する人が増えることを願う。



写真7 本旅行で一番気に入った展望(ワルミ大橋より)

新たな発見の旅

設計部 道路交通課
大橋 紀輔 (2019年入社)

1. はじめに

現在は世界各国から旅行客が訪れる沖縄。しかし、150年前は琉球王国という場所であり、独自の文化が発展し、戦争が行われていた数々の痕跡も残っている。沖縄は、多くの歴史が詰まり、多くの感動や楽しさが溢れるため、何度行っても楽しめる場所である。沖縄へは何度か訪れたことがあるが、今回も新たな発見を求めて旅立った。

2. 沖縄到着

天気予報ではいつも枠で囲まれ、高知からは遠いように感じられるが、5時間の移動は旅行への期待で、あっという間に感じた。沖縄は到着した私たちを、さんさんと輝く太陽と、特徴的な沖縄の音楽で迎えてくれた。

沖縄の空気を肌で感じ、まず目に飛び込んできたのは、多くの観光バスと多くの車である。観光客が多いため、観光バスが多いのは当たり前であるが、車も多く驚いた。

バスガイドさんの話によると、沖縄戦の復興の際に、道路や建物は復旧できたが、線路は場所を確保することができなくなり、無くなってしまったそうだ。さらに沖縄は暖かい気候のため徒歩で移動している人はほとんどおらず、少しの距離でも車を使うとのことだった。この日も、梅雨の時期ではあったが非常にいい天気で、半袖がちょうどいい気温であった。

3. 首里城

最初の目的地は首里城である。那覇市内の細い坂道の両側には、赤瓦の建物が並ぶ。そこを大きなバスがスルスルと走っていく。ふと視線を落とすと、道路の舗装が薄い朱色になっていることに気がついた。

朱色の道路は赤瓦の建物とマッチして美しい景観となっていた。道路を朱色にしているのには、いろいろ理由があるとは思いますが、景観の美しさを出すためにもしていることなのではないかと感じた。

守礼門をめぐり敷地内に入ると、ガジュマルやヤシの木が植えられ、どこかアフリカの国に来てしまったのではないかと錯覚してしまった。

その奥には、どんなに手を伸ばしても届くことのない高い石垣が見え、その石垣にある門をいくつもくぐっていくと、思わず「おおお」と声を上げてしまった。荘厳で煌びやかな装飾が施された建築に圧倒されてしまったのである。今にも王様が扉を開けて現れそうだとその場にいた全員が思っていただろう。

また、展望台からは那覇市内が一望でき、よく晴れた青い空の下できらきらと輝く赤瓦が非常に綺麗であった。

4. 心地よい波の音と豪華な夕食

私たちは、首里城を後にし、宿泊するリゾートホテルに向かった。この日は、バスに飛行機と移動していたこともあって体力は限界を迎え、うとうととしてしまっていた。「着きましたよ」の声で目を開くと、そこにはバスの窓から最上階が見えないお城のようなホテルがあった。

部屋の窓は大きく、このホテルのためにあるのではないかとタイガービーチが見えるオーシャンビュー。沖縄の砂浜を肌で感じるために、一目散に飛び出した。

さらさらとした砂の中に、小さな貝殻や珊瑚のかげらが混じっており、日頃砂浜を裸足で歩くことなど無いため、この痛気持ちいい感じがたまらなかった。また、エメラルドグリーンな海は、海の底がくっきりと見えるほどに透明度が高く、この海の色を守っていくためにも環境問題には気をつけていかないと肌で感じた。

沖縄での最初の料理は、人生で初めてのコース料理であった。綺麗に並べられたナイフとフォークに胸を高鳴らせていると、静かに料理が運ばれてきた。大きなお皿に可愛らしくのせられた料理は、とても輝いていた。

沖縄のオリオンビールもおいしく、料理を食べる手も止まらない。メインの牛ロースの厚切りローストももちろんおいしかったのだが、一番印象に残っているのが、紅芋を使ったスープである。料理が並べられた瞬間から紅芋のいい香りが漂い、舌の上でふわっと広がるなめらかさは、今まで食べたどんなスープよりもおいしかった。



写真1 ホテルから見えるタイガービーチ



写真2 1日目夕食のメインディッシュ

5. 美ら海での発見

社員旅行も2日目となり、昨晚のお酒が少し残る中、美ら海水族館へと出発した。海岸線をぐんぐん北上していくバスの中からは、新しく作られているホテルやアパートが見えた。現在もまだ自然の多く残る海岸線の地域などは、リゾート開発が進んでおり、道路整備も行われているようだ。

途中名護市街をバスが通る際、道路に水色の矢印が点々と書かれていた。そのほかにも、赤と水色に塗り分けられている部分もある。赤色の部分には歩行者のマークが、水色には自転車のマークが書かれていた。近くには名護市営球場や、21世紀の森公園があったり、海沿いを自転車で走る人が多いためか、とても綺麗に道路が整備されていた。

そんな中、目的地へとバスは到着した。この日もとてもいい天気であったが、太陽にしばしのお別れを告げ、館内に入った。しかし、館内は修学旅行生や観光客でとても賑わっており、ゆっくり見て回れなかったため、私は少し早めに出ることにした。本館の出口で私は、別館にマナティーがいることを初めて知った。柵で分けられた水槽にずんぐりとした体で可愛らしい顔をした生き物が見えた。その生物は前ひれを上手に使い、泳ぐと言うより、水中を歩いており、まるで人間のように見え驚いた。

6. 旅のメインイベント

マナティーに心を奪われていたが、出発の時間になってしまった。私は、マナティーにまた会いに来ると誓い沖縄県でとても綺麗な橋として有名な、こうり大橋の見学へと向かった。とてもいい天気ということもあり、2キロほどの橋を歩いて渡るようになっていた。

しかし初めは、こんなに暑い中歩いて橋を渡るなんて考えられないと思っていた。バスは橋の手前で停まりエンジンを切った。バスから降りた私は、さっきまでなんて愚かなことを考えていたのかと反省した。目の前にあったのは、青い空と青い海、近くに海面からひょっこりと顔を出した小さな山があるだけで一本の橋が堂々と架かっていた。その姿に私の男心がくすぐられた。長いと思っていた2キロも、沖縄の海風を感じながら歩いているとあっという間であった。

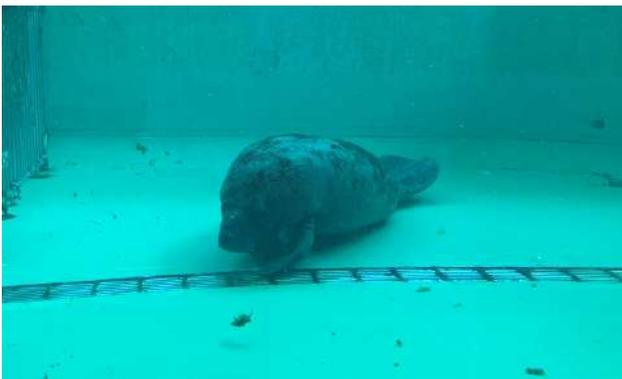


写真3 水中を歩くマナティー

7. 旅も終盤

今回の旅のメインイベントも終わり後半戦へ突入となった。やはり、旅の楽しみと言えば、夕食である。

この日の夕食は、ステーキとロブスター。旅のしおりを見たときから私が一番楽しみにしていた夕食であった。

そんな夕食の時間、最初に出てきたのは、小さな器いっぱいに入ったもずくと、なにやら怪しげな豆腐のような物であった。調べてみると、ジーマーミ豆腐というらしく、落花生を使った沖縄の郷土料理だそうだ。ほのかにピーナッツの香りがして、何か豆腐ではあるが、豆腐ではない不思議な感覚となった。

いよいよステーキの登場。熱々の鉄板の上でおいしそうな音を立て、ロブスターは鉄板からはみ出していた。満腹になり私は重要なことに気づいた。なんとまだこの旅で沖縄そばを食べていなかったのである。

8. 旅のまとめ

3日目は、鍾乳洞とエイサーショー。三線の音色と、踊り手さんの元気な声に見送られ、高知への帰路に着いた。

あっという間の3日間であったが、仕事の疲れも癒やされ、マナティーや道路、美しい橋など新たな発見もたくさんあった。やはり、沖縄は訪れる度に新しい発見をくれる素晴らしい場所であると改めて感じた。

首里城の補修作業もまだ続いているということも知り、また次に沖縄へ行くときには、違う姿になっていると思うと、また行きたいと感じた。



写真4 那覇空港にての沖縄そば

2019年5月16日(木)～19日(日)

シンガポール

シンガポールで見た橋梁

代表取締役社長
右城 猛 (1986年入社)

1. はじめに

シンガポールは1996年6月の社員旅行以来2度目である。前回は夫婦で参加した。今回は8歳になった孫も一緒である。学校の授業を軽視するつもりはないが、それ以上に外国を直に経験させることが大事と思っている。

シンガポールでの2日間の観光と自由時間は、孫の希望を最優先させて行動したが、行く先々で橋梁が目に入ると、自然に体が反応してiPadのシャッターを押していた。ここでは、それら写真を紹介する。橋梁を視察する目的で撮影していないので、中途半端な構図になっている。悔やまれるところである。

2. アンダーソン橋

アンダーソン橋(Anderson Bridge)は、シンガポール川の河口部に1910年に架けられた橋長70mの曲弦トラス橋。夜になると真っ赤にライトアップされる。アンダーソン橋を渡って左側に折れるとシンガポールのシンボル「マーライオン像」の建つマーライオン・パークである。写真1の風景は23年前と同じであるが、夜のライトアップはされていなかった。



写真1 アンダーソン橋



写真2 ライトアップされた夜のアンダーソン橋

3. エスプラネード橋

エスプラネード橋(Esplanade Bridge)は、シンガポール川がマリーナに注ぐ地点に架かる橋長260mの7径間連続コンクリートアーチ橋。1997年に完成している。橋の上にはブーゲンビリアの花が咲いていた。

4. ジュビリー橋

エスプラネード橋と平行して下流側に架かっている橋長220mのコンクリートアーチ橋が、ジュビリー橋(Jubilee Bridge)。

シンガポール独立50周年を記念して建設され、シンガポール「建国の父」と呼ばれる初代大統領リー・クアン・ユーの葬列に合わせ、2015年3月に開通された。この橋の上からマリーナ地区を一望できる。写真撮影には最高のスポットである。

23年前に写真5と同じアングルで写真を撮っている。それに写っているのは高さ226m、70階建て高層ホテル「スイソテル・ザ・スタンフォード」(1986年)とその周辺のビルだけである。マリーナ・ベイの風景は様変わりしている。



写真3 エスプラネード橋をバックに孫と私



写真4 エスプラネード橋



写真5 下流側から見たエスプラネード橋

5. スーパーツリー・グローヴ

ガーデンズ・バイ・ザ・ベイには、巨木をイメージした高さ25~50mのスーパーツリーが18本並ぶスーパーツリー・グローヴ(Super tree Grove)がある。高さ22mの地点にスーパーツリー間を結ぶ全長128mの空中の遊歩道(吊橋)が架けられていた。奇想天外な発想には驚いた。



写真6 スーパーツリー・グローヴの吊橋



写真7 スーパーツリー・グローヴの吊橋に立つ家内と孫

6. エルギン橋

エルギン橋(Elgin Bridge)は、3列のアーチ部材を持つ橋長46mのコンクリートアーチ橋。木製の跳ね橋が架けられていたが、1929年に現在の橋に架け替えられた。

橋の名称は、インド総督であったエルジン卿(Lord Elgin)の名前に由来している。

ペンキで白く着色されているが、夜には照明で真っ赤に染まる。

7. カベナ橋

カベナ橋(Cavenagh Bridge)は、1869年間に完成したアイバーを用いた斜張吊橋。スパン61mの歩行者専用橋。シンガポールに現存している橋では最も古い。

8. ヘリックス橋

ヘリックス橋(Helix Bridge)は、ステンレス鋼材を使用した二重らせん構造の5径間連続の歩行者専用橋。橋長は280m。完成は2010年。マリーナ・センター、ウォーターフロント、マリーナ・ベイ・サンズに直結し、マリーナ・ベイのランドマークとなっている。

世界で最も奇妙で美しいとされるこの橋のデザインを担当したのは、オーストリアの建築家のフィリップ・コックス。DNAの幾何学構造から着想を得たと言われている。この橋の建設を担当したのは日本の佐藤工業である。



写真8 赤色にライトアップされた夜のエルギン橋



写真9 ライトアップされた夜のカベナ橋



写真10 マリーナ・ベイ・サンズとヘリックス橋



写真13 ベンジャミン・シアーズ橋

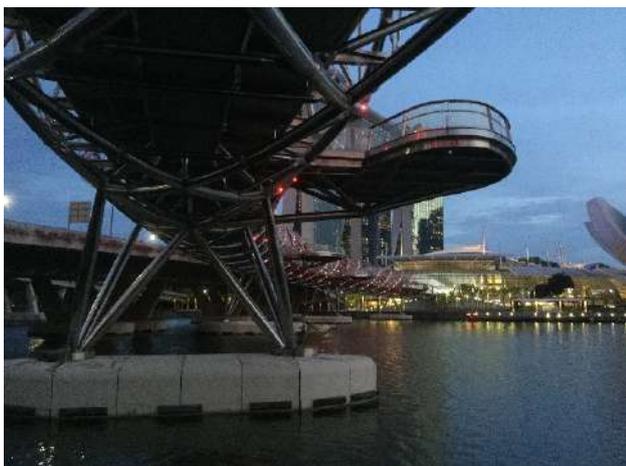


写真11 踊り場のあるヘリックス橋



写真14 観覧車から眺めたベンジャミン・シアーズ橋



写真12 二重らせん構造のヘリックス橋

9. ベンジャミン・シアーズ橋

ベンジャミン・シアーズ橋 (Benjamin Shears Bridge) は、マリーナ地区のゲイラン川を跨ぐ箇所に架けられている。1981年に日本の佐藤工業が施工したものである。

橋名の由来は、シンガポールの大統領ベンジャミン・ヘンリー・シアーズに由来している。

この橋は、シンガポールのシンボリック的存在で、同国の旧50ドル札に描かれている。日本では土木学会田中賞を受賞したことで知られ、構造物として高い評価を得ている。

10. マリーナ・ベイ・サンズ

マリーナ・ベイ・サンズは、モシェ・サフディが設計した総合リゾート施設(IR)。3体のビルの屋上に船の形状した橋「スカイデッキ」が載っている。サフディは船のデッキからこのデザインを着想したと言われている。

スカイデッキの前半分は、宿泊客専用の「スカイプール」で、後半分は有料の展望台「スカイパーク」である。

ビルの建設は韓国企業であるが、スカイデッキの製作と架設はJFEエンジニアリングが担当した。

シンガポールと言えば、マーライオンが屋上にプールがあるホテル「マリーナ・ベイ・サンズ」を思い浮かべるほど有名になっている。ホテルの稼働率は98%でなかなか予約が取れないようである。



写真15 マリーナ・ベイ・サンズのスカイパークとスカイプール

11. 湾口堰 マリーナ・バラージ

マリーナ・ベイからシンガポール海峡に注ぐシンガポール島の端にマリーナ・バラージ (Marina Barrage) というダム施設がある。全長は 350m ある。写真 16 は世界最大規模の観覧車「シンガポール・フライヤー」から撮影したものである。

シンガポールの中心地であるマリーナ・ベイの水量を一定に保つダムとして機能している。

マリーナ・ベイの外はシンガポール海峡で、太平洋とインド洋を結ぶ主要航路となっており、無数のコンテナ船が行き交っている。

以前、台湾の高尾に行ったとき、台湾海峡を無数の船舶が行き交う光景を見て驚いたことがあった。これが国際航路というものかと改めて知らされる思いがした。



写真 16 マリーナ・バラージ

12. 今回の旅行で思ったこと

23 年前のシンガポールは、高層ビルが林立し急速に近代化が進められていたが、魅力は感じられなかった。今回も大きな期待はしていなかった。ところが来て驚いたのは、マリーナ・ベイとセントーサ島の変わりようであった。

「マリーナ・ベイ・サンズ」と「リゾート・ワールド・セントーサ」の二つの統合型リゾートがオープンし、多数の観光客で賑わっていた。世界最大規模の観覧車「シンガポール・フライヤー」、世界最大級の水族館「シー・アクアリウム」は観光客を惹きつける。

ヘリックス橋やマリーナ・ベイ・サンズなどの建造物は、一度見たら忘れられない大胆なデザインを採用していた。日本の土木構造物の設計では、施行性・経済性・維持管理性を重視する。シンガポールでは、「観光客の記憶に残るユニークなデザイン」が採用の判断基準になっているように思えた。

日本よりもはるかに経済に勢いがあると感じられたので、経済統計データを調べて見た。

世界の一人当たりの名目 GDP ランキング(2018 年)は、シンガポールが 704 万円で 8 位、日本は 432 万円で 26 位である。

2018 年のシンガポールの外国人観光客は 1,850 万人である。日本の 3,119 万人に比べると 1/1.7 に過ぎない。しかし、シンガポールの国土面積は日本の 1/520、人口は日本の 1/23 であることを考えれば、多いと言える。

シンガポールは、1955 年にマレーシアから半ば追い出される形で独立した。国土面積は佐渡島よりも小さい。特段の天然資源もない小国が急成長を遂げ、日本をはるかに超える豊かな国になった。

23 年前の社員旅行のとき、現地のガイドから「外に子供の姿を見ないでしょう。子供たちは学校が終わるとそのまま塾に行つて勉強しています。」と説明を受けたことを思い出した。今回も、子供連れの観光客は大勢見たが、地元の児童が外で遊んでいる姿は見られなかった。

世界大学ランキング(2018 年)を見ると、シンガポール国立大学は 22 位で、アジアではトップである。日本は東京大学が 42 位、京都大学が 65 位である。

シンガポールの急成長は、教育に徹底的に力を入れ、世界の競争に勝てる人材を育てた結果であろう。

国の財政にゆとりがあれば、戦略的に国際競争力を高めるための手を打つことができる。しかしながら日本は、少子高齢化、人口減少、労働力不足、自然災害の多発、財政赤字の拡大など多くの課題を抱え、デフレ不況から抜け出せない状況にある。

今の日本は、労働生産性(2018 年)が OECD 加盟 36 カ国中 20 位である。先進 7 カ国(G7)では最下位に甘んじている。わが国では 2016 年から政府主導で働き方改革が進められている。労働生産性向上を目指していたはずであるが、電通の過労死問題の発覚以降、働き方改革の議論は一気に「時短」に傾いた。今年の 4 月からは改正労働基法の施行が始まった。

本当にこれで良いのだろうか。明治維新や戦後には、志の高い情熱のある若者を思い切って登用した。期待された若者は、寝る間を惜しんで必死に働いた。その結果、日本は驚異的な速さで経済成長を遂げた。今こそ過去の経験に学ぶべきではないだろうか。



写真 17 セントーサ島のユニバーサル・スタジオの入り口。
左より金剛一君、妻の絹恵、孫の堀田祐希 (8 歳)、筆者。

発展するシンガポール経済の柱

取締役相談役

矢田部 龍一 (2017年入社)

1. シンガポールに向けて出発

5月16日の早朝6時過ぎ、渡部さんの車に4人が相乗りして広島空港に向けて出発。日本は抜けるような5月の青空が広がっている。一方、シンガポールは雨模様とのこと。熱帯のスクールの洗礼は受けたくないなと思いながら今治・小松道路を走る。しまなみ海道を抜けて2時間ほどで広島空港に到着。広島空港で高知からの本隊と合流。総勢38名がシンガポールのチャンギ空港に向けて出発。6時間もすれば、赤道直下に近いシンガポールに降り立っている。LCC網の整備のお陰もあり、外国が本当に近くなった。

2. 発展するシンガポール

シンガポールは、1965年にイギリスから独立した若い国である。国土の面積は淡路島ほどの小さな国であり、そこに、568万人もの人が生活している。人口密度は、1平方キロメートル当たり8000人にも上る。これを支えているのが、アジアでもトップクラスの活発な経済活動である。シンガポールのGDPは2019年に5040億シンガポールドルと予想されている。実に40兆円にも達する。一方、四国のGDPは14兆円足らずである。四国の土地面積は1万8800平方キロメートルであり、シンガポールと比べれば20倍以上も広いが、GDPは半分以下である。20年前のGDPを比較すると四国とシンガポールはほぼ同じであるが、この20年間で随分と差がひらいた。

(1) 国際空港の整備

シンガポール経済を支える柱をいくつか示しておく。一つは、チャンギ国際空港である。年間旅客数は6500万人である。四国四県の空港を合わせても旅客数が800万人足らずであることを考えるとチャンギ国際空港の旅客数は群を抜いている。

チャンギ国際空港の旅客数を2017年で見ると、北京、羽田、香港、上海、広州、ジャカルタに次いで、アジアでは7位、世界では18位にランクされる。僅か568万人の人口しかない国としてはとんでもない数値である。また、2018年度世界の都市の渡航先ランキングでは、バンコク、ロンドン、パリ、ドバイに次いでシンガポールは世界で5位である。なお、チャンギ国際空港は、旅客アンケートにより、世界トップの評価を得ている。

(2) ハブ港湾の整備

また、世界トップクラスのハブ港湾である。水深15mのコンテナバースに、毎日60隻のコンテナ船が接岸し、



写真1 クレーンが林立するコンテナふ頭

6万個のコンテナの積み下ろしがなされる。取り扱うコンテナ貨物の8割は周辺諸国への積み替え貨物であり、全世界の中継コンテナ流通量の実に17%を占める。これだけの取扱量を誇るのには、迅速なサービスで利用者の利便性を高めるとともに同時にコストダウンを実現したからである。1988年には、世界に先駆けてIT化に着手し、今日では着岸から離岸まで12時間以内というスピードを達成している。この利便性と経済性により、多くのコンテナ貨物を集めることに成功している。

(3) 金融都市としての整備

また、シンガポールは世界を代表する金融都市である。経営コンサルティングA.T.カーニーは、ビジネス活動、人的資源、情報交換、文化的経験、政治的関与の5つのカテゴリーで、20を超える評価基準をもとに、カテゴリー別のスコアを算出、合算し、総合ランキングを作成している。この評価による国際競争力の高い金融都市ランキングでシンガポールは、ロンドン、ニューヨークに次いで3位にランクされている。ちなみに4位は香港、5位は東京である。

また、最も影響力のある都市ランキングでは、1位がニューヨーク、次いで、ロンドン、パリ、東京、香港、ロサンゼルス、そして、シンガポールと世界7位にランクされている。シンガポールは金融においても、都市の魅力においても世界を代表する都市である。

3. 金儲けの仕組みに溢れた観光地

シンガポールの観光地は数多い。今回の旅行で訪れたのは、マーライオンパーク、マリナーベイ・サンズ、ガーデン・バイザ・ベイ、スーパーツリーグローブ、クラウドフォレスト、キラキラ夜景ポート、マリナーベイ・サンズナイトショー、セントーサ島のアンダー・ウォーターワールド、マーライオンタワーなどである。その他にも、何日間もの滞在を飽きさせないほどの観光施設を有している。また、政府公認のリゾートワールドセントーサとマリナーベイ・サンズのカジノを始めとして、多

くのカジノがあり、長期滞在の観光客を飽きさせない。

シンガポールには歴史的建造物は殆どない。上にあげた観光地も、大半がこの最近開発されたものである。国の象徴的存在であるマーライオンは1972年に建設された。その後、近くに橋がかけられたことにより正面から見ることができなくなって、2002年に現在の場所に新設されシンガポールを代表する観光名所の一つとなっている。また、セントーサ島にあるマーライオンタワーは37mの高さがあり、人が登って、周囲を見渡せるようにしている。ここにも多くの観光客が訪れている。

シンガポールを代表するマリーナベイ・サンズホテルの開業は2010年である。並んで建つ3つのホテルの建物を船の形をした空中庭園「スカイパーク」が繋いでいる。スカイパークの広さは1haで、プールと庭園、ならびに展望台がある。ホテルには2500室と世界最大のカジノを備えており、年間2000億円もの売り上げがある。

マリーナベイ・サンズホテルが夜に2回実施するレーザー光線と噴水をコラボしたナイトショーも一見の価値がある。日本では打ち上げ花火の迫力と美しさに驚かされる。マリーナベイ・サンズホテルのレーザー光線のナイトショーも、それに劣らない迫力である。

100haもの巨大植物園「ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ」には18本の巨大ツリーがある。また、植物園の中にあるドームに覆われた「クラウドフォレスト」は30mを超える人口の山から流れ落ちる滝があり、山の周囲にはランなどの多くの植物を植え付けている。極めて人工的な空間であるが、観光客はそれなりに満足感を得ている。

日本には、多くの滝があり、緑に溢れた溪流と爽やかな樹林などを満喫できる。しかし、シンガポールには山も無ければ、溪流もない。それを逆手にとって、人口の滝を再現している。

セントーサ島の世界一の規模を誇るとも言われる水族館「アンダー・ウォーターワールド」では、可愛い魚を多く見せてもらった。特に、小さなクラゲが乱舞していた水槽は魅力的であった。蒸し暑いシンガポールでは、ヒンヤリとした水族館にいただけで気持ちがいい。



写真2 人口の滝が流れ落ちるクラウドフォレスト



写真3 アンダー・ウォーターワールドで見た小さなクラゲの乱舞

4. 税制も合理的である

シンガポールは所得税の最高税率が20%、法人税は17%、さらに相続税や贈与税はかからず、キャピタルゲインも非課税と金持ちにとってはありがたい国である。この税制により世界から金持ちを集めている。

一方、懲罰的に高い税金を課す商品もある。代表的なものは、車、酒、たばこなどであろうか。カローラクラスで900万円程度とのことである。これでは車を持てる人は限られる。狭い国土に住む500万人もの国民が全員、車を持つと大渋滞が発生する。車を増やさないための高い関税である。酒税も高い。飲食店でビールを頼むと、最低でも日本の倍はかかる。またタバコも一箱1000円程度と高い。罰金もべらぼうに高く、所定外のところで吸えば、ばか高い罰金を徴収されることになる。

いい悪いは別にして、極端な税制の導入により、富裕層を呼び込み、車の渋滞を防ぎ、酒やたばこの害を未然に予防する。これだけ極端な税制を導入できるのは、一党独裁に近い強い政権があつてのことである。しかし、経済の発展が国民の不満を和らげている。また、経済の発展が多く移住者を呼び寄せ、人口増加に結び付いている。

シンガポールは、建国後、僅か54年しか経過していない小さな国である。しかし、経済発展に向けて強引とも思える各種の施策を取り入れ、大いなる成果をあげている。シンガポール国立大学のランキングも、東大は言うまでもなく、中国や香港の大学も押さえて、アジアでトップである。人口600万人足らずの小さな国であるのに、大したものである。四国に住む私たちも学ぶべきことは多い。

5. あとがき

今回の第一コンサルタンツのシンガポールへの社員研修旅行は極めて有意義であった。小さなシンガポールが目覚ましい発展を遂げている様子を目の当たりにした。四国は豊かな自然と歴史ならびに文化に恵まれている。これらを活用した四国の成長戦略を考えてみたい。

最後に、研修旅行でお世話になった各位に心より感謝申し上げる。

近代的観光地シンガポール

調査部 取締役統括部長
弘田 伸 (1987年入社)

1. はじめに

近年、目覚ましい発展を遂げる国シンガポール。シンガポールといえば、昔はがっかり名所のマーライオン。近年ではマリーナベイ・サンズに代表される近代的な観光地や富裕層が集まる国という印象がある。前回1996年の社員旅行は参加できず初めての旅となる。自分の目で見てシンガポールの魅力を感じたい。

2. 1日目（移動日）

今日はシンガポールまでの移動日。朝5時に貸し切りバスで会社を出発し広島空港へ。10時25分発のシルクエアーで約6時間かけチャンギ国際空港に到着。機内食はフィッシュフライとパスタのセットを選択。味が薄すぎて不味い。味覚の違いを痛感。先が思いやられる。

18時宿泊先のマンダリン・オリエンタルホテルに到着。

夕食はウルフギャングズ・ステーキハウスで熟成肉を堪能。満足できる味で一安心。食事の後はスーパーマーケットに行き食事情を確認。日本でなじみの品は倍位の値段。全体的に物価が高い。しかし、手ごろな値段のお土産もあり少し購入。今日の予定は終了。

3. 2日目（市内観光）

今日は1日市内観光。やはり最初はマーライオンパーク観光。ここではマーライオン像とマリーナベイ・サンズと一緒に収まるため観光客の撮影スポットとなっている。夜になるとライトアップされており昼間とは違った景色が楽しめる。続いてミーハー気分でもマリーナベイ・サンズのスカイパーク展望台に上る。シンガポールの超近代的な高層ビル群やマリーナ湾の景色は絶景。眼下には世界的に珍しい海上スタジアムやF1グランプリの市街地コースなどが見渡せる。残念ながら展望プールには宿泊してないため入場できなかった。

午後からはガーデンズ・バイザ・ベイへ。最大50mの人工の木「スーパーツリー」はSFの世界に飛び込んだように圧巻である。スカイツリーの間には空中の散策路「スカイウェイ」が架かっており、ガーデン全体を見下ろすことができる。今日の天気はどんよりしており時々太陽が顔をのぞかす程度だが、とにかく蒸し暑い。

次にガラス張りの巨大なドーム、クラウド・フォレストへ。ドームの中は35mの人工の山が作られている。入場すると最初に頂上から流れ落ちる滝が目飛び込んでくる。山の表面には熱帯植物がびっしり植えられてお

り、散策路をぐるぐる回りながら探索する。食虫植物なども展示しており興味深い。管理はさぞかし大変だろうと心配になる。

夕食後はボートに乗り、マリーナベイ・サンズナイトショー「スペクトラ」観賞へ。色鮮やかなレーザー光線、噴水、音楽が融合するナイトショーは圧巻で心奪われる。

その後、最後の夜を楽しむため屋台に繰り出す。これが大失敗。焼き鳥に似たものを注文するが、甘くて不味い。かき氷を注文したら色は鮮やかだが味が無い。お客さんは大勢いて繁盛している。注文した品物が悪いのか、自分の味覚は変なのか。大変残念であった。

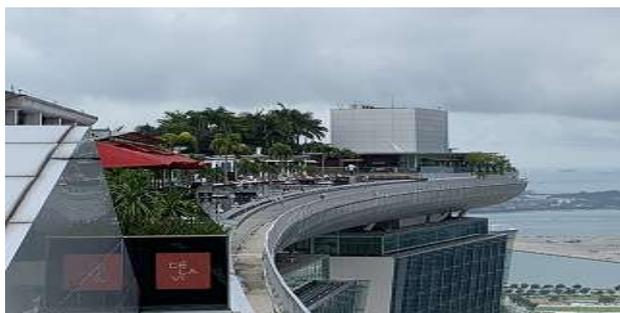


写真1 マリーナベイ・サンズのプール。残念ながら入場できない



写真2 超近代的な高層ビル群



写真3 マリーナベイ・サンズの色鮮やかなナイトショー

4. 3日目（セントーサ島）

今日は1日自由行動。私は小野部長夫妻、田中副技師長、西岡部長と一緒にセントーサ島観光に行くことにした。

9時にホテルを出発。タクシーでセントーサ島に渡るためのケーブルカー発着地、マウントフェーバーパークに向かう。タクシーに乗り込むと運転手は何やら話しかけてきた。直ぐには理解できなかったが、セントーサ島で観光するために必要なチケット売り場に案内するということだ。少し高くついたチケットもあったが、旅先なのであまり気にせずまとめて購入し、目的地に向かう。

到着後、島に渡る前に少し寄道し公園内を散策。シンガポールの街並みを見下ろすことのできる、高さ105mの丘の上には3mのマーライオン像が立っている。せっかくなので記念撮影し駅に向かう。

ここからがスリル満点。8人乗りのケーブルカーに5人で乗り込み出発。結構な高さに驚かされる。扇風機はついているが暑い。周りはガラス張りで360度景色が観られる。途中、高速道路や海の上を通り、島に入るとユニバーサルスタジオシンガポールなどが眼下に広がる。所要時間10分程度でセントーサ島に到着。料金は高いが空からの景色を堪能し大満足。

島に着くと、高さ37m、シンガポール最大で唯一、中に入れるマーライオンを見学。まず、シアタールームで「マーライオン伝説」を5分ほど鑑賞。エレベーターで展望デッキに上る。大きく開いた口の部分に移動すると鐘を鳴らすよう、促される。鐘を鳴らすとマーライオンの幸運にあやかれるそうだ。旅先での幸運を祈る。

次に、セントーサ島内で東西に通るケーブルカーに乗る。ちなみに最初に購入したチケット料金にセントーサ島内の乗り物（ケーブルカー、モノレール）の料金も含まれている。こちらからはビーチの景色が最高。降りて海水浴でもしたい気分だったが、そのまま乗り続け元の駅に戻る。

その後、世界最大級の水族館シーアクアリウム水族館に行く。ここでは世界最大級のアクリルパネルでできた水槽があり圧巻。高さ8.6メートル、横幅36mもある。日本の企業が製作したものである。肉眼では一枚に見えるが何枚かつなぎ合わせて作っている。高度な技術には驚くばかりである。昼食は、ピザとポテトにビールで乾杯。何かほっとする瞬間である。帰りはモノレールで本島に渡り、駅からタクシーでホテルに戻り、空港出発までの時間を過ごす。



写真4 スリル満点のセントーサ島に渡るケーブルカー



写真5 シンガポール最大のマーライオン像
口の部分から展望できる



写真6 綺麗な砂浜とバンジージャンプ場



写真7 シーアクアリウム水族館の世界最大級の水槽

5. おわりに

シンガポールの街は緑が多く、掃除が行き渡っている。ガムの持ち込みやポイ捨て禁止など細かく罰金が決められており、そのおかげで観光地が綺麗に保たれているのだろう。喫煙場所が意外と多いのには驚いた。また、夜遅くまで出歩いても安心して治安が良い。食事に関しては、店によって差があり味覚の違いが感じられた。相続税、贈与税がなく富裕層が優遇されているようだが、海外から企業が集まらなければこれほどの観光施設は作れないだろう。

昨年のヨーロッパは歴史の重みを感じたが、今回は正反対の近代的な観光地。違った意味で有意義な旅となった。

シンガポールでの実践英会話

設計部 取締役統括部長
西川 徹 (2011年入社)

1. はじめに

今年の社内旅行の行き先は、シンガポールである。当社の社内旅行は家族同伴が OK なので、今年は日頃から大変お世話になっている妻を誘ったところ、快諾を得られた。

というのも、妻は近い将来、姉と二人の海外旅行を企てており、それに向けて姉妹で英会話の猛勉強をしているのである。そこで、私が勉強の成果を試す旅行として、手軽な海外旅行を体験できるシンガポールへ誘ったのである。

本旅行では、基本的に必要なやりとりは妻が行い、それを英会話ができない私が多少フォローする体制とした。本文は、このふたりの珍道中をまとめた旅行記である。

2. 1日目：高知からシンガポールへ

早朝 5:00 に会社を出発し、バスで広島空港まで移動した。そして、シルクエア MI867 便にてチャンギ空港へ出発する。機内のキャビンアテンダントは全て外国人であり、日本語を話す方はおられなかったが、機内サービスを受ける妻は、会話のレスポンスが遅いものの、堂々とやりとりをしており、少し安心をした。

空港到着後、この旅行の拠点となるマンダリンオリエンタルホテルシンガポールへチェックインした。15階の部屋からは、大観覧車のシンガポールフライヤーとマリーナベイサンズが一望でき、二人で感動し、喜んだ。

部屋で一服した後、夕食のウルフギャングステーキハウスシンガポールまで、バスで移動する。一日中移動で疲れていたが、冷たいビールととても大きなステーキに、社員の皆もテンションが上がって来たようである。

その後、滞在中のビールやつまみの買い出しに出かけたのであるが、ここでも妻がお店の場所の聞き取りやレジの支払いをしてくれた。レジでは少し私のフォローが入ったのであるが、それなりにやりとりをしていたので関心した。

3. 2日目：シンガポール市内観光

今日は終日、バスでのシンガポール市内観光である。

マーライオン、マリーナベイサンズ、ガーデンバイザベイ、スペクトラ（マリーナベイサンズナイトショー）、お土産屋、そして昼食の点心、夕食のレッドハウスのクラブチリと、盛りだくさんであった。

特筆すべきは、湾内に複数の船がある中でも、マリーナベイのナイトショーを真正面の特等席から見る事が

できたことである。これは JTB ツアーの方の特別なお力と思われるが、その苦勞と配慮に感謝したい。

その後、一日中歩き回って疲れた身体を、ホテルのプールでクールダウンさせた。

実践英会話というと、買い物では多少妻の英会話が活躍する場面があったものの、ガイド付きのバスでの観光地移動では、なかなか英語を話す機会が無かったのが少し残念であった。



写真1 ホテルの部屋からの素晴らしい夜景



写真2 盛り上がったウルフギャングの大きなステーキ



写真3 主役に隠れて寂しそうなミニマーライオン



写真4 巨大な植物園のガーデンバイザシー

4. 3日目：実践英会話にチャレンジ

自由行動の本日は特に予定を立てていなかったのですが、この二日間の強行スケジュールで疲れていたふたりは、近場の買い物とホテルでのんびりすることにしました。

滞在中の朝食はホテル4Fのメルトカフェでとるのであるが、これがまたビッフェ形式で品数が多くとても美味しいのである。食べたくても食べきれない品数であった。ここでの卵料理は個別に注文しその場で調理してくれるのであるが、昨日、今日と二人それぞれ英語で注文をした。料理人が言うワン・ツーが、卵がひとつ・ふたつなのか、片面・両面かで色々と議論し、WEBで調べたりした。その結果、今朝は思い通りの卵料理を食べることができた。妻はこの様な料理人とのやりとりが、楽しかったようである。

昼食後は、鈍った身体に少し負荷を与えるために、朝のスイミング。少しひやりとした水が気持ち良かった。そして、市内へ買い物に出かけた。お目当てはラッフルズホテルとスーパーマーケットでのお土産である。

ラッフルズホテルは現在改修中でホテル全景は見ることができなかったが、多くのお土産を購入することができた。買い物では妻の実践英会話が活躍したのであるが、レジの方が流暢な日本語をしゃべっていたのが残念である。

その後、スーパーマーケットで美味しそうなケーキがあったので、購入することにしたが、店員が早口の英語で話すので、ふたりとも全く理解できなかった。仕方が無いので指さして注文したのであるが、妻は少し悔しがっていた。

汗だくになって買い物からホテルに帰って来たので、まずはプールでクールダウンし、のんびりとプールサイドで昼寝をした。ここでは多くの西洋人がのんびりとしていたのであるが、日本人の姿は見れなかった。日本人は時間いっぱい観光・買い物で楽しむが、西洋人は日焼けも兼ねてのんびりするスタイルが多いのである。

そして、プールサイドにあるイタリア料理のドルチェ・ヴィータで遅い昼食をとる。ここではお母さんの実践英会話が大活躍し、ランチセットの内、パスタだけを抽出して注文することができた。とても美味しい生ビールとパスタ、そして楽しい会話を楽しむことができた。

この旅行の最後は、世界最大級の観覧車であるシンガポールフライヤーからシンガポールの夜景を楽しんだ。

5. 4日目：シンガポールから高知へ

最終日は、深夜1:45発のシルクエア MI868 便で、広島空港まで移動した。その後、バスにて高知へ出発し、ほぼ予定通りの13:30に会社へ到着した。

6. おわりに

今年の社内旅行は、妻同伴の旅行となった。妻は他のご夫婦や社員の方々との会話や、実践的な英会話を楽しむことができ、とても喜んでいて、普段、なかなか妻に

感謝することができない私にとっても、良い旅行となった。

ただし、夫婦ふたりの実践英会話という点、あまり使い物にならないことが現場でよく分かった。少し落ち込んでしまったが、伸び代があるということは、今後の楽しみが多いということである。次回の海外旅行に向けて、ふたりで英会話の勉強をしなければならない。



写真5 とても素晴らしかったマリーナベイナイトショー



写真6 ビジネス街の夜景を見ながらのナイトスイミング



写真7 朝食で卵を料理してくれるステーションと料理人



写真8 おもてなしに溢れたドルチェ・ヴィータでの昼食

文化と経済が交錯する国シンガポール

設計部 河川砂防課
生田 万祐子 (2012年入社)

1. はじめに

待ちに待った社員旅行。今年はシンガポールへ行くことになった。暑い国とは聞いているが、それよりも冷房が気がかりだ。海外の冷房は極度の寒がりの私には刺激が強いためである。赤道付近の国へ行くにはふさわしくないが、少々厚手の服を用意しておいた。

早朝5時にバスに乗り込み、広島空港からシンガポールへ出発した。飛行機内はなかなか冷房がキツく、早速厚手の上着が役に立った。

2. いざシンガポールへ!

シンガポールに到着したのは夕方だった。初日は夕食のみの行程だ。昨年イタリアぶりの海外である。

入国審査に向けて事前に英語の受け答えを必死に練習したのだが、特に何も質問されずあっさり入国できた。日本人の信用が高い証拠だろうか。今後もマナーには気を付けよう。

今回泊まるのは「マンダリンオリエンタルホテル」という5つ星ホテルらしい。予想外の高級ホテルにテンションが上がる。壁を大きく切り取った様な窓から見える景色は、これまた絶景だった。

夕食は熟成肉ステーキだ。こんなに分厚い肉を食べるのは初めてかもしれない。あまりの量にテーブルから歓声と悲鳴が上がっていた。しかもこれでも日本人向けにサイズを小さくしているらしい。しっかりとした赤身の肉で、あっさりしていたのでぺろりと完食できた。肉食女子としては幸せなひとときである。しかし、デザートチーズケーキについては少々甘過ぎる上に味に繊細さが欠けていた。日本の洋菓子の偉大さを思い知る。また、シンガポールでは紅茶が有名なだけあって、食後に出された紅茶はとても美味しかった。お土産候補として脳内にリストアップした。



写真1 分厚いステーキ肉(日本人サイズ)

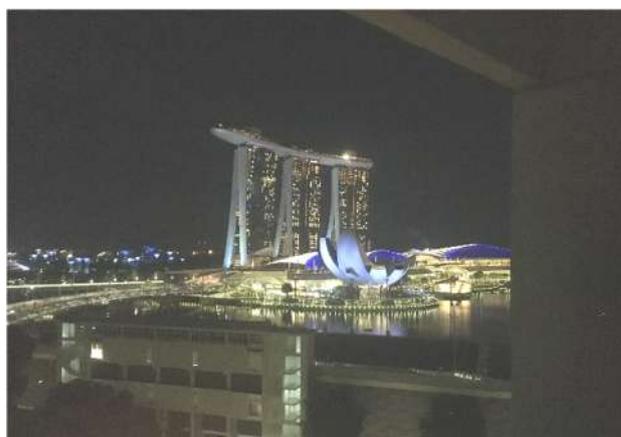


写真2 五つ星ホテルからの夜景

3. シンガポール市内観光

2日目は丸一日かけての市内観光である。

まず、シンガポールのシンボルとも言えるマーライオンに会いに行った。マーライオンについては「世界三大がっかりスポット」という不名誉な噂を耳にしていた。水を吐いていない・後ろ姿しか見えないといったことからそう言われていたらしい。しかし現在はリニューアルされ、豊富に水も吐き、新たに設けられた栈橋のおかげで前からの鑑賞も可能となっていた。ぴかぴかの白いマーライオンは、見事汚名を返上していたのである。ここぞとばかりに大勢の観光客に倣って、私もマーライオンの水を口で飲むというベタな記念撮影に勤しんだ。

次は「マリーナベイ・サンズホテル」のスカイパークからの景色を楽しんだ。この後訪れる予定の「ガーデンズバイ・ザ・ベイ」の人工ツリーもバッチリだ。端の方では女性の憧れであるあの有名な「インフィニティ・プール」が見えるところがあり、プールから絶景をバックに自撮りをしている人がたくさんいた。私も次に来るときは、是非このプールからインスタ映えを狙ってみたいと思う。

昼食は飲茶である。蒸し物数点と、焼きそば、トドメとばかりに炒飯が出された。見事に炭水化物のオンパレードだ。しかし、さすが東南アジア。海老料理は抜群に美味しい。ぷりぷりで身も大きく、食べ応えがあった。

私はアルコールに弱いこともあり、旅行中はノンアルコールを貫いた。オレンジジュースは生搾りがほとんどでとてもおいしかったため、ノンアルコールでも充分楽しめた。しかし一口貰ったココナッツジュースだけは、無人島生活でもしないかぎりおそらく二度と口にしないだろう。

シンガポールのビールは「タイガービール」が主流である。聞くところによると、非常にあっさりした味とのことだ。しかしこれがとにかく高い。この店ではタイガービール1缶が12\$もした。1\$=90円程度と考えると1000円超えである。シンガポールはお酒に非常に厳しく、お酒の販売が夜22:30以降禁止されているようだ。(レストラン・barでは提供OK)



写真3 定番のポーズでマーライオンと記念撮影



写真4 憧れの「インフィニティ・プール」

午後からは「ガーデンズバイ・ザ・ベイ」を訪れた。いわゆる超巨大植物園である。シンボリック的存在であるスーパーツリーに架けられた吊り橋を渡る頃には、すこしどんよりとした空が一気に晴れ渡っており、強い日差しが降り注いでいた。寒がりの私もさすがに汗がにじむが、頑なに長袖を貫いた。もはや意地である。吊り橋は思いのほか揺れが大きく、生まれたての子鹿のような足取りで出口に向かうのはめになった。ここは高所恐怖症の人にはオススメできない。

次に「クラウド・フォレスト」という、施設内にあるガラスドームに向かった。高山の植物と人工の滝のあるエリアである。特に興味を持っていた食虫植物エリアは、期待ほど多くの食虫植物はなかった。ラフレシアはレゴで作られたものが展示されていた。ここには滝を模した巨大な人工の塔に植物がびっしりと張り巡らされており、内部の見学中に上からロープでぶら下がりながら手入れを行っている作業員をちらほら見かけた。やはりこれだけの規模になると、メンテナンスは大変だろう。ドーム内は温度管理が徹底され、20度に保たれているらしい。しばしの涼み時間となった。

さて、いよいよ夕食の時間である。この日の夕食は、待ちに待ったシンガポール名物「チリクラブ」だ。前から食べたいと思っていたので、楽しみだ。大皿にドーンと大きな蟹が2匹仲良く並んでいた。ビニール手袋をは

めて、いざ実食!とはいかず、チリソースを纏った蟹丸ごとの姿に皆なかなか手を出さない。しばらくすると、他のテーブルから「甲羅が飾られてるだけで足は解体されている」と聞こえてきたため、やっとう重い腰を上げ、蟹の爪に挑むこしにした。チリソースでベタベタになりつつ、蟹スプーンとペンチの様な物で思い思いに解体していく。ペンチは使い方がよくわからなかったが、蟹スプーンについては万国共通らしい。日本と同じ蟹スプーンだった。爪以外の部分はあまり身がなかったこともあるが、肝心の味については、蟹の身が特別美味しいと言うほどではなく、まさしく「蟹」の味だった。チリソースは蟹のうまみがあって美味しかった。蟹を食べるというより、チリソースを楽しむ料理だなと思った。その他に出された料理はこれまた飲茶が中心だったが、どれもとても美味しかった。特に炒飯は絶品だった。

市内観光最後のメインイベントは、ナイトショー「スペクトラ」である。私はてっきり船で夜景を見るだけかと思っていたのだが、船の上から噴水によるナイトショーを見るものだったようだ。川の向こう岸にたくさんの人がごった返しているのを横目に、マリーナベイ・サンズの真ん前に陣取って、水と音楽と光のショーに釘付けになった。残念ながらプロジェクションマッピングはマリーナベイ・サンズ側からしか見られないようだが、船の上から見るのもなかなか体験できないだろう。皆食い入るようにショーを鑑賞し、シャッター音は途切れることがなかった。



写真5 名物!「チリクラブ」



写真6 ナイトショー「スペクトラ」

4. 自由行動とお土産さがし

最終日は空港出発まで丸々自由行動である。前日に観光は十分に楽しんだので、自由行動ではショッピングを堪能しようと決めていた。

まず、ショッピング街である「オーチャード」に MRT で向かった。ホームには自動ドアが設置されており、日本よりもハイテク感があつた。路線は比較的わかりやすく、特に問題無くオーチャードに到着できた。

シンガポールではあまりお土産文化が無いらしく、何処へ行っても「マーライオンチョコ」「マーライオンクッキー」「マーライオンの置物」が三種の神器のように置かれていた。日本人に人気のお土産屋「メリッサ」がオーチャードにあるとのことだったので、そこで定番のお土産を物色することにした。

すぐ近くに高島屋があつたので、海外にある日本の百貨店はどんなものかと思い少し立ち寄ってみた。今まで入ったどのモールよりも混み合っている。地下には食品売場の他にフードコートもあり、日本のチェーン店も入っていた。日本でも慣れ親しんだ店がたくさんあり、すこしかたこの日本語を聞く度に、「あ、ここは海外だった」と気がつくくらいには日本と同じ百貨店の光景だった。

次は「リトル・インディア」のムスタファ・センターと呼ばれる店に向かった。日本でいう「ドン・キホーテ」のようなところである。そこでも追加のお土産を買い込んだ。お目当てのコーナーを見つけると、そこへ次々と日本人が入れ替わり立ち替わりやってきた。私たちと同じで、ガイドブックに載っているお土産を物色しにきたようだ。その区画だけ日本語が飛び交っており、なんだかちょっと安心してしまった。

お土産も充分確保したので、お昼ご飯を食べに「チャイナ・タウン」へ向かった。ここでのお目当ては名物の「チキンライス」である。シンガポールに来たら絶対食べたいと思っていた。B 級グルメが集う屋台の集合施設の様なところを「ホーカーズ」というらしい。高知のひろめ市場のようなものだ。少々迷いつつも、なんとかお目当ての店にたどり着けた。着いたのは 13 時を回ったころだったにも関わらず、その店だけ明らかに長蛇の列である。ガイドブック片手に並んでいる日本人が多く、ガイドブックの影響力の大きさを目の当たりにした。



写真7 「チキンライス」 ちなみに赤いソースは激辛。



写真8 これが「ホーカーズ」だ!!

5. シンガポールという国

シンガポールは国土も狭くほとんどが平地で、高低差があまりないことから、水資源の問題に悩まされてきた。国内の貯水池だけではまかないきれず、隣国のマレーシアからパイプラインで原水を購入している状況である。しかし、マレーシアから水の価格を値上げすると迫られていることもあり、資源問題への根本的な解決策として、再生水「ニューウォーター」計画を進めている。これは、海水の淡水化にも使われている逆浸透膜による高度ろ過技術によって、下水の再生処理を行い飲用水に利用するものである。マリーナ湾の湾口をせき止めて淡水化し、将来飲用に供するための「マリーナ・バレッジ」と呼ばれる最新式のダムも完成している。次に来る時は、こちらの見学もしてみたいものだ。ちなみに「ガーデンズバイ・ザ・ベイ」にあるスーパーツリーも、雨水を受け止め庭園に水を供給する重要な役割をもった人工ツリーなのである。

また、シンガポールは法律が厳しいのでも有名だ。特に驚いたのは「チューイングガム持ち込み禁止」である。ゴミのポイ捨てや痰を吐いたりするのも罰則規定があり、ガムも「国を清潔に保つ」取り組みの一環である。確かにシンガポールでは至る所にゴミ箱が設置されており、ゴミ箱からゴミが溢れているようなところは見かけなかった。おそらく定期的に回収されているのだろう。また喫煙所も厳しく制限されており、黄色い枠で囲われた場所以外での喫煙は禁止されている。



写真9 実はスーパーな機能を持ったスーパーツリー



写真 10 黄色の枠内が喫煙スペースとなる

トイレ事情についても、比較的どこでも綺麗で使いやすい。台湾・グアム・イタリアと訪れたが、トイレはダントツで清潔に使われていた。面白い法律といえば、MRTの「ドリアン持ち込み禁止」の項目だ。MRTの壁にもドリアン禁止のマークを何度か見かけた。ドリアンが身近ではない我々からすれば冗談の様な法律だが、それだけ匂いが強いと言うことなのだろう。ドリアン、おそるべし。

6. そして帰高へ

チェックアウトの後は、ホテル周辺のショッピングモールで夕食を食べ、22時に空港へ出発した。いよいよ帰国である。「チャンギ国際空港」は世界一の空港とされているらしく、夜中でも賑わいを見せていた。お土産は十分に購入済みだったが、店がたくさんあったので移動しながら見て回った。買いそびれていたTWGの紅茶も購入できた。TWGは、オシャレで人気のシンガポール生まれの紅茶ブランドである。このティーバッグはコットン100%で全て手縫いのため、値段もお高めだ。今度の休日に美味しいケーキと一緒に頂くことにしよう。今から楽しみである。

長いようで短かったシンガポール旅行もいよいよ終わりが近づいている。思いの外疲れが蓄積されていたのか、帰りのフライトでは半分以上寝て過ごした。

広島国際空港にて無事入国審査を済ませ、バスに乗り込み高知へ向かう。

そして我々一同は、3泊4日のシンガポール旅行を無事終えることができた。



写真 11 広島国際空港へ無事到着

7. おわりに

今回シンガポールへ初めて訪れてみて、お金で動いている国だなと思った。シンガポールのマリーナエリアは、リゾートホテルとブランドものの店があちこちに立ち並んでいる。ここはまさしく「バカンスを楽しむ国」だ。

社員旅行の醍醐味は普段話す機会の無い人とも話せることだと思っている。今回の旅行でも、いろんな人の意外な一面を見ることができた。また、海外に来て毎回思うのが英語力の必要性である。旅行中も何度か困ってしまうことがあり、その度に回りに助けて貰った。

そして改めて日本がいかにも過ごしやすく恵まれているかを思い知る。海外に行く度、「日本だったら・・・。」と思う事が多い。だからといって、海外を倦厭することはない。それぞれの国では、それぞれ独自の文化があり、一つとして同じ物は無いと思っているからだ。そしてそれは、その国でしか体験できないものだ。理解することは難しい。けれど、それを体験しなくてはとうてい理解することはできない。理解できなくとも、自国の文化との違いを感じることで、より自国の文化への理解が深まることにも繋がっていくと思っている。

さて、次はどこに行こうかな。

シンガポール 4 日間の旅

設計部 防災まちづくり課
金 剛一 (2019 年入社)

1. はじめに

今まで私が旅行した国は日本を初め、台湾、中国、ベトナム、そして今回のシンガポールである。全てがアジアの国である。似ているようだが、それぞれ特色がある。今回のシンガポールは多民族国家という特色があり、様々な文化が混在している国であった。

2. 1 日目

朝 5 時に会社から広島空港へ向い、シンガポール行きの飛行機に乗り込んだ。時差は 1 時間、気になるほどではなかった。約 6 時間の飛行を経て 15:30 ぐらいに樟宜(チャンギ)空港に到着した。シンガポールは赤道に近い国で高温多湿で、一言で表すと蒸し暑い。空港を出て間もなく、涼しいバスでホテルへ移動した。

ホテルはマンダリン・オリエンタルホテルで 5 つ星の高級ホテルだった。ロビーから今まで泊まったホテルとは格が違うことを感じながら、部屋の中へ入ると案内、素晴らしい部屋が待っていた。荷物を置き、ホテルの中を回っていると、いつの間にか集合時間となっていた。夕飯は世界的に有名なウルフギャングステーキで、熟成肉を使う事で有名ならしい。

ステーキは期待通りに美味しく、普段あまり飲まないワインと一緒に堪能する事ができた。5 月生まれの皆さんにケーキも準備されていた。おめでとうございます！



写真 1 WOLFGANG のステーキ

美味しい食事を済ましてから、ホテルに戻って初日の日程は終わった。その後、スーパーに行きたい人でグループを作り、スーパーに行くことになった。スーパーはホテルから歩いて 15 分の距離であったが、何度も道を聞きながら行ったため、倍以上かかってしまった。中国語

で道が聞けてシンガポールは不思議な国だと思った。ほとんどの看板は英語で表記されているが、歩行者たちは割と中国語で話す人が多かった。まさに多民族国家だと感じた。

スーパーに着いてびっくりした事が 2 点ある。1 点目は物価が高いということであった。大体のものは日本のスーパーより高い。特に酒が高い。缶ビールが 500 円した。2 点目は、値段は高いが食べたかったらいつでも和食を食べられるぐらい、たくさん日本の食べ物が置いてあった。買い物が終わってホテルに戻り 1 日目は終わった。

3. 2 日目

朝 6:30 に目が覚めた。部屋に置いてあった時計のアラーム時間がなぜか日本の時間に設定されていた。シンガポール時間では 5:30 だった。

二度寝をしてから、朝ご飯を食べに行った。初めて食べる高級ホテルでの朝食だったため、またワクワク。中に入ると一緒に来ている社員がすでに食事をしていた。期待通り朝食は美味しかった。野菜よりは揚げ物や脂っこい物が多かった。

2 日目の日程は、マーライオンの見物から始まった。マリーナベイサンズが見えるマーライオンパークは、朝からたくさんの人がいた。タイミングよく集合写真が撮れた。ちょっとした自由時間に写真を撮ったが、記憶に残っているのは、中国系の女の子に撮影を頼んだ所、社長一家と立っていたらイエーイと言ってくれたことがきっかけで自然な流れでいいポーズで写真が撮れたことである。



写真 2 社長一家と一緒にイエーイ！

いい写真も撮れ、気分も良いまま、免税店への買い物に移動した。ここで日本のツアーと韓国のツアーの違いを感じた。韓国のツアーは免税店に行くことは少なく、ツアーのお客さんを対象にしたショップに行くことが多い。今回の JTB のツアーでも昼ご飯を食べて天然ゴムの枕やマットレスを販売する店に行った。韓国のツアーだと何軒もツアー客向けのショッピングに連れ回される場合が多い。韓国のツアーは格安ツアーが多く、その損害を補うためにショッピングやオプションツアーで儲けようとする。そういう意味では、免税店にショッピング

に連れてくれる所は韓国人の私にとっては意外であった。買い物後、マリーナベイサンズホテルのスカイパークに行った。有名ホテルを実際目にすると思った以上に迫力があつた。中もとても綺麗なんだろうと感じた。

展望デッキから眺めるシンガポールは本当に都会で、自分の故郷である釜山を思い出させてくれた。映画でも良く出てくるインフィニティプールが少し見えたが、横から見るプールと自分がそのプールに入る時の気持ちは違うはず。シンガポールも発展した国だと聞いてきたが、聞くことと見ることには大きな差がある。狭い地球と言われているが、死ぬまで何ヵ国を訪れることができるか考えてみると、私は地球がそんなに狭くはない気がする。

昼ご飯を食べ終え、外でバスを待っていた時にふと軽自動車が見えないことに気がついた。ガイドさんに事情を聞くと、関税と取得税の関係で、車本体の価格が安くても課させる税金が高く、結果的に軽を買う最大のメリットでもある値段の意味がなくなるとのことだった。軽でも800万円かかるなら、900万の普通車を買った方がいいということで、軽が目につかなかったようだ。国土が狭い分、車の台数を強制的に制限している国である。他にもシンガポールは社会的ルールがたくさんある。たばこは指定の黄色い線の中でしか吸えないようになっていた。日本も韓国も指定した場所で吸うのがルールだが、シンガポールのルールはそれよりもさらに厳しかった。適度なルールは必要であるが、縛りすぎると人はいずれか爆発する事を何回も見てきた。こんなに発展しているシンガポールだが、果たしてシンガポールの人は幸せなのか？ふとそういう疑問を感じた。



写真3 展望デッキで見たシンガポール



写真4 ガーデنزザベイ

その後の目的地はガーデンズバイザベイだった。夜はライトアップで夜景が綺麗で知られているが、昼の景色もまた良かった。涼しいドームの中にいろいろ植物があり、気持ちよく観光することができた。

夕食は有名なチリクラブを食べた。味は良かったが、皆食べ方が分からなくて、3分ぐらいどう食べようか議論をした。それでも答えがみつからず店員さんに食べ方を教えてもらい、やっと食べる事ができた。残ったチリソースをチャーハンにかけて食べると風味が増して一段とおいしく食べる事ができた。

食べ終わってからは船に乗って、川の中央でウォーターショーを鑑賞した。真正面にマリーナベイサンズが見えて、15分ぐらい続くショーは本当に美しく、シンガポールの夜を楽しませてくれた。夜景を見ながら、今度は嫁さんとあのマリーナベイサンズの有名なプールでウォーターショーを見たいと思った。イルミネーションは夜になったら輝くように、お互いに磨き合える相手と一緒に輝く時が来ることを考えた2日目の夜だった。特に今回は夫婦同伴で来ている方が何人かいて、余計に結婚生活は幸せそうと感じることになった。



写真5 Red House のチリクラブ



写真6 ウォーターショー

4. 3日目

自由行動の日が来た！社長一家3人と一緒に行動を計画していた私は朝食を食べてロビーで合流し、タクシーでセントーサ島に向かった。そこでびっくりしたのは、タクシーがベンツであったことだ。後から調べたら車種によって料金が違ったが、知らなかった私はベンツであることにびっくりした。乗り心地は日本のタクシーとあまり変わらないことに驚いた。それと特徴的だったのはERPという遮断機のないETCゲートのようなものがあり、その下を通ると自動的に料金が徴取される。セントーサ島に入る時もERPがあり、料金の支払い時に料金がぐんと上がっていくのを見た。こういったシステムがあることを知らない観光客にとっては、ぼったくりにあったような気になるかも知れないと思った。

ホテルからセントーサ島はタクシーで20分ぐらいの距離である。入口からリゾート感があり、綺麗な島だった。大規模で有名な水族館に行ったが、ものすごい人混みで、大阪の海遊館の方がよかった。宣伝上手なのか、皆が行きたいようにさせる能力はさすが観光業が盛んなシンガポールだと思った。

水族館の後は、ホテルのプールへ行った。最初はベンチで日光浴しながら寝転がるつもりだったが、せっかくの綺麗なプールだったため、入ることにした。湿度が高いシンガポールで入るプールは適度な水温で気持ち良かった。もうちょっと筋トレしておけば良かったと思った。何事も起きてから後悔したのでは遅い。事前に様々なことに備えておく習慣を付けたいと思ったシンガポールのプールだった。



写真7 水族館



写真8 マンダリンオリエンタルのプール

プールに入った後シャワーをあげ、マリーナベイサンズのカジノに一人で向かった。カジノの中は写真撮影が禁止。残念ながら映画でしか見たことがないルーレットやブラックジャック、スロット等様々なギャンブルができる所だった。シンガポール人がカジノをするには入場料が必要だが、外国の旅行客はパスポートだけ見せればタダで入れた。私は入って一番無難なスロットをやった。一回200円ぐらいで、1000円を入れて回すと20秒も経たないうちに1000円が消えた。あまりにも早かったからもう1000円を入れて回したら、なんと100倍に当たって一瞬で2万円になった。思わぬ当たりでびっくりした。もうちょっとやってみようと思って5分が立つと1万円ぐらいまで減っていた。何もかもが一瞬で起こった。1万円でも持って帰ろうとカジノを後にした。一瞬でお金が増えるとなぜか自分のお金ではない感覚になる。勝った1万円より、最初の1000円を失ったショックの方が大きかった。短い時間だったが、カジノの儂さを感じたい経験だった。

5. 終わりに

シンガポール旅行に出る前日も9時ぐらいに寝ようとしたが、結局寝たのは12時近くだった。それほどに楽しみにしていた初めての社員旅行。社員旅行は堅苦しいと思っていた自分のイメージとは違って、皆ウキウキしていて、楽しく様々な話ができただ。また、初めて行くシンガポールということもあって、何もかもが新鮮に感じられた。いろいろな事を見て、聞いて、体験したことが刺激になった。普段、一緒に仕事していない社員の方と交わした会話も自分の人生にいい影響を与えている楽しい社員旅行であった。これからもっと第一コンサルタントで頑張りながらいろいろ体験と共に成長していきたいと思う。

発展を続ける国 シンガポール

設計部 部長
須内 寿男 (2017年入社)

1. はじめに

初めて訪れたシンガポールは、聞きしにまさる大都会であった。高層ビルやタワーマンションが林立し、地下鉄網も完備している。清潔な街や高知市とは比べものにならない都会ぶりに、筆者の東南アジアに対するイメージが修正された。本報告では、筆者が感じた観光国としての同国の勢いを述べたい。

2. シンガポールの地理・地質概要

シンガポールは、マレー半島の南端とジョホール水道で隔てられたシンガポール島と、周辺の小島で構成される島嶼（とうしょ）からなる国である。南側のインドネシアとの間にはシンガポール海峡が位置する。シンガポールの面積は東京23区と同程度の720km²である（外務省HP）。ほぼ赤道直下にあり、日本との時差は1時間となっている。

地質は花崗岩、堆積岩、洪積層および沖積層で構成されている（図1）。

地形は丘陵地形で、最も標高の高い丘陵でも166mと全体がなだらかである（JAICA HP）。

3. 埋め立てを続ける国

本島の南側の海岸は、広い範囲で埋め立てが行われてきた。そして今後も埋め立てを続けていくとのことである（現地ガイドの大塚さん）。チャンギ空港をはじめ、今回の旅行で宿泊したマンダリン・オリエンタル・ホテルよりも海側の一帯も埋め立て地であり、訪れたマラーイオンパーク、高さ200mのスカイパークを頂くマリーナ・ベイ・サンズ（図2）、植物園のあるガーデンズ・バイ・ザ・ベイ（図2）、高さ165mで世界2位の観覧車シンガポール・フライヤー（図2）など、これら海岸付近の観光施設はすべて埋め立て地に建設されたものである。

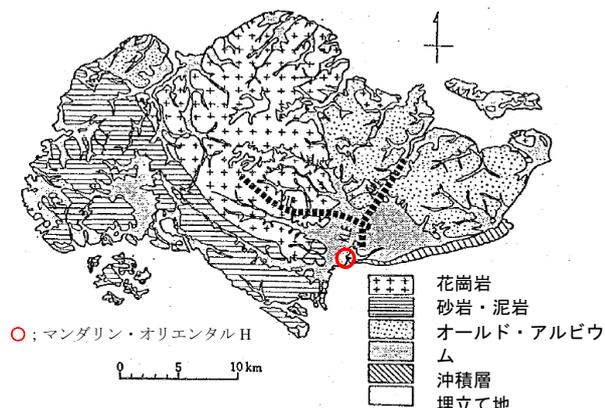


図1 シンガポールの地質図 (JICA HP)

埋め土材料としてはオールドアルビウム(Old Alluvium)と呼ばれている洪積層が用いられている (JICA HP)。同層はシンガポール島の東北部に広く分布し、平均厚さ100m、島の面積の1/4程度を占めている。礫、砂、粘土の互層からなり、N値は砂層で20~50、粘土で10~50である (JICA HP)。

4. 人工物と多彩な食が観光資源

シンガポールは前述のようになだらかな地形のため河川の流速が遅く、大陸で見られるように粘土が混濁して茶色く濁ったまま海に流下している。そのせいか、熱帯の島でありながら、サンゴ礁は見られない。つまり、風光明媚ではない。それにもかかわらず、世界中から観光客が訪れるのは、ほかでは経験できない観光施設や多彩な食を安心して楽しめるからではないだろうか。2013年まで世界一であった観覧車シンガポール・フライヤー、特異な形状のマリーナ・ベイ・サンズなどは一度行って自分の目で見ておく価値はあり、「百聞は一見にしかず」を実感した。両施設を含め主要な施設は夜間に照明が灯されるほか、マリーナ・ベイ・サンズの前では毎夜ナイト・ショーが繰り広げられ、昼も夜も楽しむことができる。この旅行でもショーを遊覧船から間近で楽しむことができた。毎夜毎夜、周辺住民にとっては迷惑かもしれないが、日本の片田舎からきた観光客にとっては圧巻であった。

そのほか訪れたガーデンズ・バイ・ザ・ベイの温室（図2）、自由時間に渡ったセントーサ島的水族館や、訪れはしなかったがユニバーサル・スタジオ・シンガポール、カジノなど、興味をそそるものを続々と建造し、世界中から観光客を惹きつけて金を使ってもらおうとする意志が感じられた。

食べ物に関しては、宿泊したホテルでの朝食ビュッフェの種類の多さに驚いた。また街のレストランでも、初日の夕食で摂ったステーキや翌日のチリクラブ、3日目にセントーサ島で食した魚料理（スズキ）など、西洋料理や中華料理が充実しており、日本と変わらず良い味であった。また中心街オーチャードの地下鉄サマセット駅付近では、中華、ドイツ、スイス、イタリア、和食など様々な国の料理を提供するカフェテリアが並んでいる。妻と入ったイタリア料理店でも、おいしいシーフード・ピザとドイツビールを納得できる価格（二人で40S\$足らず）で楽しめた（図3）。

もっとも、冷房の効いたビルの中にある高級な店では、ワイン1本300シンガポールドルとか、立派な店構えの和食店のコース料理が400シンガポールドルなどのメニューも目にしたので、安い店ばかりではなく様々な需要に対応できている。これら高級レストランと同じフロアにある和食のどんかつ屋が大繁盛していた。価格は15~20シンガポールドル、老若男女、家族連れなどでいっぱい、行列ができていた。シンガポールの人たちも安くておいしい店を知っているようだ。



図2 ガーデنز・バイ・ザ・ベイのフラワードームに咲く蘭
ドームの中は涼しい。



図3 イタリア料理店のピザ

土曜日の夕方かなり込み合っていた。シーフードピザで生地は薄目。香ばしく焼きあがっていた。ビールはミュンヘンの白ビール。ピザと良く合う。

5. 清潔で安全な街

シンガポールの市街地は、かねて雑誌などで知っていたとおり、ごみ一つ落ちていない清潔な街であった（図4）。しかし残念ながら、それは植え込み以外の箇所の話であり、植え込みの中を見ると吸い殻だらけのところもあった。

感心したのは、繁華街の交差点の歩道側に直径20cm、高さ80cm程度のステンレスの車止めが1m程度の間隔で設置されており、車が歩道に突っ込んできても被害が少なくすむようになっていることである（図5）。5月8日に滋賀県大津市で保育園児が犠牲になった事故の記憶が新しく、このような車止めの必要性を感じていたところだったので、強く印象に残った。

また、MRT（Mass Rapid Transit、大量高速輸送）と呼ばれている地下鉄のプラットフォームでは、透明な防護壁が設置されており、扉は電車の扉の開閉と同期する（図6）。これについても、安全への配慮が感じられた。



図4 ビジネス街の交差点

金曜日の昼時。歩道など路上にはごみ一つ見当たらないが、手前の植込みを覗くとタバコの吸い殻が散乱していた。



図5 交差点の歩道に設置された車止め
ステンレス製で強固に見える。オーチャード



図6 地下鉄プラットフォームの防護壁口

MRTと呼ばれている地下鉄では、列車とホームの間に防護壁が設置されており、扉は列車のドアの開閉と同期する。シティ・ホール駅。

6. おわりに

観光国としてのシンガポールに我が高知県を対置してみると、高知県が観光県として発展していくために生かすべき長所や課題がいくつか見えるような気がする。長所としては、シンガポールにない自然環境、特に清流の美しさ、歴史的建造物、新鮮でおいしい食材などが思い浮かぶ。一方、課題としてはインフラ整備、市街地や道路のごみ・雑草対策、語学も含めた教育レベルの向上、観光客の受け入れ体制の充実などである。

高知県は東西に長く、観光スポットをめぐるのに時間がかかりすぎることが以前より指摘されている。シンガポールでは、車で1時間以内にセントーサ島も含め主要な観光地に行けるので、移動で疲れることがなかった。高知県の中心部に、これまで注目されてこなかった観光資源が眠っていないか、気をつけてみてみたい。

念願のシンガポール

設計部 地盤防災課
中平 隆文 (2014年入社)

1. はじめに

今回の社員旅行は、シンガポールである。私は、2016年度社員旅行候補地アンケートにシンガポールがノミネートされて以降ずっとシンガポールへいつか行きたいと思っていた。シンガポールへ行けることが確定して以降、ネット検索やテレビ番組などで十分過ぎる程の予習をし、シンガポール旅行へと旅だった。

2. 罰金

シンガポールは、国の治安と美化を守るため日本では考えられないような罰金が設けられている。例えば、私が普段仕事中に眠気覚ましとして噛んでいるガムは、国内に持ち込むだけで罰金8万円や横断歩道のない場所での道路の横断は罰金1万円など日本、特に私のような田舎の方で育った人間にはかなり注意しておかないとすぐ罰金の対象となる行為が多数あった。

3. 食文化

シンガポールでの食事は、シンガポールが日本同様に海で囲まれているためか、甲殻類の料理がほとんどであった。そのため、甲殻類が苦手な私は、毎食のようにでてくる甲殻類にかなり苦戦していた。苦手なのが甲殻類だけであればよかったが、どうやら私は東南アジア系の料理が苦手なようであった。1日目の夜に訪れた高知で例えるなら『ひろめ市場』のような場所で様々なものを口にしたが、ことごとく口に合わなかった。

この旅行で唯一満足できた料理は、最終日の出国前に食べた一風堂のラーメンであった。普段は、健康に悪いためスープを飲むことはしないが、このときは久々に食べた日本のラーメンがやけにおいしく感じ、器に注がれていたスープを飲み干してもまだ足りないほどであった。



写真1 初日に訪れた市場



写真2 一風堂のラーメン

4. 観光

シンガポールの観光スポットの中でも一番心に残っている場所は、昼は上から、夜は下から観光した『マリーナベイ・サンズ』である。

高さ200mの超高層ビル3つをサンズ・パークという空中庭園で繋いだ形となっている。その空中庭園は、展望台と宿泊者専用プールになっておりシンガポールを一望することができた。残念なことに私たちは、マリーナベイ・サンズの宿泊者ではない。そのためよくテレビや雑誌などに取り上げられている屋上プールには、入場することができず、横からの見物だけであった。

夜になると光と水のショーが行われた。私たちはそのショーを屋形船から見物したが、とても幻想的で言葉にならない程美しかった。



写真3 マリーナベイ・サンズの屋上プール



写真4 光と水のショー

5. シンガポールの朝

私は今年も、早朝ランニングを実行した。普段とは全く違う土地を走ると時間を忘れ楽しく走ることができる。

シンガポールの朝は、湿度は高いが気温はそこまで高くない。想像していた以上に走りやすかった。ホテルの近くにある1周3km程度のランニングコースを走っていると、まだ日が昇っていないにも関わらず老若男女のたくさんの人たちが、私と同じように走っていた。その中には年配の男性10人ほどで形成されたグループや、子供だけのグループなど、団体で走っている人たちも多く、シンガポールの人たちは朝から活発だなと思った。

6. カジノ

私がこの旅行で一番楽しみにしていたところがカジノへ行くことである。

1日目の団体行動の時間が終わるとすぐに、ホテルへ帰り、カジノで遊ぶ身支度を整え、心待ちにしていたホテルの近くにあるマリーナベイ・サンズカジノへと向かった。

カジノへ到着すると、パスポートを提示し、身分の確認を行ったうえで、ついに待望のカジノへと入場することができた。カジノの中には、私がこれまで味わったことのない、大人な空間が広がっていた。カジノ内でのカメラ撮影は禁止となっているため、写真はないがゲームなどでよく見るカジノがそこにはあった。ルーレットやスロットなどといった様々なゲームに、有象無象の人たちが集まっており、中には、歓喜か悲痛か分からないが奇声を上げている人もいた。

ひと通りカジノ内を散策したあと、ルーレットを体験してみた。お金がお金ではない感覚となり、どんどん賭けてしまう。幸いにもこの日の私は、運がよかったため、シンガポールでこれまで使ったお金を取り返すくらい、お金を増やすことができた。しかし、調子に乗った私は、次の日もカジノへ行ってしまい、前の日儲けた分を失った。



写真 5 毎朝走ったランニングコース

7. 誕生日

初日の夕食の際、昨年度の社員旅行に続き誕生日を祝っていただいた。社会人になってからは、仕事が優先となり誕生日を祝っていただける機会が少なくなっていたため、とてもうれしかった。

8. おわりに

私は、冒頭にも書いたようにシンガポールへずっと行きたいと思っていた。実際にシンガポールへ行ってみると私たちが宿泊したホテル周辺のような観光地には、ゴミ1つ落ちておらず、私のイメージ通りの綺麗な街で、寝る時間を削ってまで遊ぶことができた。しかし、観光地から外れた地区へ行ってみると、ゴミなどが散乱していたり、あちらこちらに浮浪者が横になっていたりと、イメージとは真逆な場所もあり、どこの国にも光と影があることを改めて実感した。

今回の旅行は、私がこれまで行った社員旅行の中で、最も色濃く心の中に残っている。またいつか、お金と仕事に余裕ができたならシンガポールへ行こうと思う。



写真 6 5月が誕生日の社員たち



写真 7 遊び疲れたのか空港に横たわる人々

異世界

設計部 地盤防災課
岩瀬 誠司 (2018年入社)

1. はじめに

今回の社員旅行で海外に行くのは5回目であった。シンガポールは赤道直下の東南アジアに位置する。東南アジアを訪れるのは、大学時代に行ったタイ以来であった。しかしながら、タイとシンガポールは全く違う雰囲気のある国であった。また、これまでに行ったことのある海外と比較しても全く違う雰囲気であり、まさしく異世界であった。

レポートのタイトルを「異世界」としたのは、単なる国の雰囲気をそのように感じたからではない。シンガポールに在住する人たちの暮らし、訪れる人たちの雰囲気、産業、延いては、シンガポールという国の成り立ちから「異世界」と感じたからである。

シンガポールと言えばマーライオンである。(写真1)マーライオンは、上半身がライオン、下半身が魚の像である。シンガポールの国名の由来は「獅子」を意味する「シンパ」が語源となっている。現代シンガポールの歴史は新しく、1965年8月9日にマレーシアから独立をした。毎年建国記念日には、広場で盛大にパレードが開かれるらしく、滞在中には早くも、建国パレードの準備が行われていた。

2. シンガポール観光

シンガポール滞在の2日目はツアーによる観光、3日目は自由行動による観光をした。

2日目のはじめは、マーライオンパークから始まった。シンガポールを象徴するマーライオンが望むのは、シンガポールシンボルであるマリナーベイサンズである。マリナーベイサンズスカイパークからの眺めは素晴らしいものであった。(写真2)スカイパークからの眺めで一番驚いたのは、海峡を横断する貿易船の数である。世界最大級の貿易拠点であるシンガポールらしい風景であった。



写真1 マーライオンとオフィス街

昼食を挟んで、午後からはシンガポール原産の天然ゴムの寝具販売店を回った後、植物園「ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ」に行った。赤道直下の熱帯植物が多く見ることができた。広大な敷地の中に、ガラス張りのドームがあり、その中に滝がそびえ立っていた。(写真3)自然植物と人工物が融合した演出となっており、その演出には驚いた。

夕食の後は、ナイトクルーズ。シンガポールの夜景を船の上から眺め、マリナーベイサンズの噴水ショーを船上から見ることもできた。(写真4)船上から見えるショーは背面であり、正面から見ると、プロジェクションマッピングによる演出が楽しめるようであった。



写真2 スカイパークからの眺め



写真3 植物園の様子



写真4 ナイトクルーズからの噴水ショー



写真5 ミュージカル鑑賞

3日目の自由行動の観光では、ミュージカル「オペラ座の怪人」を鑑賞した。世界的に有名な演目であり、小説、映画、ミュージカルを見るほど、個人的には好きな演目である。自宅にあるDVDは英語版であるため、現地の鑑賞でも何ら問題なく楽しむことができた。(写真5)

シンガポールでの食事は、一日目の夕食はステーキであった。2日目は中華料理が中心であった。(写真6)街中をよく見ると中華料理店が多いように思えた。これは中華系の「華人」と呼ばれる人がシンガポールに多いことが要因だと考えられる。その他に日本料理を出すお店も多く見られた。3日目の夕食では、シンガポールの居酒屋に行った。これまで数回海外に行ったことがあるが、海外で日本食を食べるのは初めてであった。恐る恐るお寿司を注文したが、おいしくいただくことができた。

(写真7)



写真6 2日目の夕食



写真7 3日目の夕食

3. 虚像

シンガポールではツアーによる観光と自由行動による観光をした。しかし私はシンガポール滞在中、終始不思議な感覚をもっていた。この国の虚像を見ているような感覚であった。街を散策すればするほど、この国には、誰が住んでいて、誰が経済を動かしているのだろうかと思ふ不思議に思う。

例えば、昨年訪れたドイツでは、我々と同じような観光客も見かけた一方で、現地の人たちの「生活感」を見ることができた。しかし、シンガポールでは、「生活感」がほとんど感じられないのである。これは、滞在したエリアがリゾート地である事が大きな要因の一つであると思うが、産業の成り立ちと自国経済、多くの観光客、世界金融会社のビル群、数多く行き交う貿易船、現地で生活する人たち。これらを俯瞰して見たときに、やはり不思議な感覚はなくなる。何か実態のない虚像を見ているようであった。このように感じる要因は国家の成り立ちによるものであると考えられる。

シンガポールは東京23区より少し大きい国土面積に550万人の人が住んでいる。国の領土は埋め立てによって拡大しており、急速に都市化が進んでいるのが特徴である。GDPは世界平均を下回る約29兆円であるが、一人当たりの生産額は大きく、経済は成熟しているといえる。マライオンパークの付近はオフィス街となっており、世界各地の金融機関が集まっていた。世界最大級の貨物取扱量を誇る港を有し、毎日大量の貿易船が行き交う。

(写真8)

シンガポール滞在中には、我々日本人観光客の他に、中国や韓国などアジア圏からの観光客や欧米人の観光客をいたるところで目にした。また、町中の案内表示は、多言語に対応しており、日本語の案内表示も多く目にした。

これらのことから、シンガポールの経済は、貿易を中心とする物流サービス、金融サービス、観光産業、によって成り立っている。



写真8 数多く行き交う貿易船

4. 合理化都市シンガポール

シンガポールは、急速に成長している新興国である。経済発展中の国や、経済の成熟した国は、あらゆる課題を抱えていることが多いが、シンガポールが抱える課題は少ないように感じた。

シンガポール産業の一つの柱となっているのが、観光産業である。世界には観光産業を大きな柱としている国はたくさんある。しかし、そのような国や地域は様々な課題を抱えていることが多い。例えば、今回の社員旅行で1・3班が訪れている沖縄は、第三次産業、とりわけ観光産業の比率が大きい。観光客の流入によって経済の動向が左右され、経済規模が大きくなりにくいのが特徴である。シンガポールは、経済規模が大きいわけではないが、生活は豊かである。一人当たりGDPは日本よりも高い。

昨年度の社員旅行で訪れたフランスも観光産業を柱としている国である。外国人が多く流入する国は、治安が悪化しやすいが、シンガポールはそれを感じさせることはなかった。

これらの要因として、規制の多さが挙げられる。チューイングガムの持ち込みが禁止されていることや、たばこに関する規制、落書きやポイ捨てに対する罰金規制など、景観を綺麗に保つための規制が多く存在する。

経済が成熟した国で問題になるのが渋滞問題である。シンガポールの人口密度はモナコ公国に次いで世界2番目に大きい。しかし、通勤時間帯であっても街中の道路は渋滞することなく、比較的スムーズに通行している。シンガポールは小さな国土面積を生かした、公共交通機関の発達により、車を持たなくても移動できる仕組みが出来ている。さらに、車の所有台数を国が管理し制限を設けている。個人が車を所有するには、所有権を手に入れることが必要となる。所有権はインターネットを介したオークションで売買され、所有権を得るための大きな経済的障壁が存在する。車の所有を経済的障壁と権利の交付により制限しているのである。また、有料道路の料金も変動制であり、日中の通行量の多い時間帯の通行量を高く設定している。

これらの規制により、シンガポールは合理化された仕組みの中で日常生活が送られている。大陸としての歴史はあるものの、現代シンガポールの歴史は新しく、諸外国を参考にしながら「つくられた都市」であることが、合理化都市を実現しているのだと考える。

5. シンガポールの正体

シンガポールの領土は、東京23区とほぼ同じ面積であり、埋め立て地によって領土を拡大させてきた。

また、シンガポールには大きく分けて3つの民族の人たちが生活している。華人、マレー系、インド系である。複合民族の国は珍しくないが、これらシンガポールの人口に対して、シンガポール国籍を保持している割合は、約61%である。つまり約39%はシンガポール国籍を

持たない外国人である。先に述べたように、シンガポールの経済を支える産業は、貿易、物流、金融である。シンガポールは、世界経済を動かす拠点、言い換えればオフィスとして存在するのである。

シンガポールは少子化問題に直面している現実があるが、労働力を多くの外国人が支えている。多くの労働力が外国人によって賄われ、自国通貨が海外へ流出すると、自国通貨が値崩れを起こすことがあるが、シンガポールドルの価格は安定し、通貨安を保っている。これは、シンガポールの市場規模が小さいことと、貿易、観光産業によって外貨を獲得していることにより自国通貨を安定的に流通させているのである。しかしこれだけの要因では、自国通貨を安定的に保つことは難しい。もう一つの要因は、シンガポール金融管理局(MAS)が、為替介入等の方法によって、自国通貨価値を調整していることが考えられる。日本の中央銀行である日本銀行はある種政府から独立した期間であるが、シンガポールの金融政策においては、実質的に政府が金融操作を行っている。

さらに、シンガポールの国会は、一院制をとっているため合理的な立法を実現することができる。

国家は、大きく①領土、②国民、③主権(政府)、の3つの要素から成り立つ。シンガポールは、埋め立てによって領土を拡大し、人口の25%が外国人であり、合理化された政府の統制によって成り立っている。これが、シンガポールの正体である。しかし、このような実態は、現地を見るだけではわからない。だから虚像を見ているように思えたのである。この虚像の姿から「異世界」のように思えた。

6. 今後のシンガポール経済

先に、シンガポールの正体について述べた。シンガポールは政府主導の金融政策、国策により、健全な経営をしている。資本主義社会にありながら、これほど統制された国は珍しいであろう。この状況をどのように判断すれば良いかわからないが、決して悲観するものではない。現代シンガポールの歴史が浅いことから、合理的な国家経営ができるのである。比較的小規模な市場を有し、政界最大級の貿易拠点であり、外需の影響を受けやすいことは確かであるが、現在のシンガポール経済は健全であり、安定した投資先である事は間違いない。今後も諸外国が今と同じようにシンガポールに対して投資(シンガポールを拠点として諸外国が経済を回す)することで、シンガポールが世界経済の中で一人負けをすることは考えられにくいと考える。

さらなる発展を感じた都市

設計部 橋梁構造課 係長
西村 紘寛 (2008年入社)

1. はじめに

今年で7年連続の社員旅行となる。私にとっては初の2年連続海外となった。また、今年も班長を務めさせて頂き、こちらは5年連続を数える。

さて、今年の行き先であるシンガポールは、旅行前には「暑い」や「派手で奇抜な都市」というイメージしか持っていなかった。正直あまり惹かれるものは無いと感じていた。そうした状態で2泊4日の研修旅行に出発した。

2. 観光スポット巡り

一日目は移動および夕食のみであった。実活動は二日目からとなる。

二日目は、世界的にも有名な観光スポットを巡った。天気は曇り空でイマイチだったが、いきなり赤道直下の直射日光を回避でき、暑さに慣れるのには丁度よかった。

(1) マーライオン

まずはマリーナ地区にあるマーライオンパークへ向かう。マーライオンは、世界三大ガッカリ観光スポットとして有名であることは知っていた。しかし、2002年に移設が行われ、当初背中しか拝めなかった像は、今では前から横からも伺えるようになっており、多くの観光客で賑わっていた。

(2) マリーナベイ・サンズ

マリーナベイ・サンズは2010年に建設されたホテルである。建物は3つのホテルタワーの上に船をイメージした屋上デッキ(通称スカイパーク)からなる特徴的なデザインである。スカイパークからは都市全体を見渡すことができたが、目に入ったもので最も驚いたのは海を渡航している船の数。軽く100隻は超えているかと思われた。さすが世界でも上位にランクインする貿易国である。

また、当ホテルは2500もの客室数を有しているが、その稼働率は97%であることを現地ガイドから聞き、これにも大変驚いた。一日でいくら売り上げているのだろうか。

(3) 天然ゴム利用の寝具店

東南アジアは天然ゴムの生産量が世界シェアの9割以上を占めている。この寝具店では、ゴムの特徴である反発性と抗菌性を生かして枕の製造販売を行っている。枕は肩こりやイビキがひどい人向けに設計されているらしい。一度横になり枕を使用して見たが、現在使用している枕より遥かに寝心地がいい。旅行参加者は皆気に入っており、半数近くが購入したのではないだろうか。私も欲しかったが財布との相談で諦めることとした。

(4) ガーデン・バイザ・ベイ

ガーデン・バイザ・ベイはマリーナベイ・サンズに隣接す

る植物園で、都市の緑化促進を目的として創設されたものである。あまり植物には興味が無かったが、入園してすぐに向かったスーパーツリークロブの奇抜さに驚いた。日本人では発想しないようなデザインをしている。異空間の植物園に迷い込んだように感じた。熱帯地域で生活する人はこういう風に植物が見えているのだろうか。

園内を散策している途中から日差しが差してき、本場の暑さに苦しめられた。しかし、次の見学コースが運良くクラウドフォレストという室内植物園であり、痛い日差しから逃れることができた。しかも園内は室温20℃に設定されており、低湿多湿植物を栽培している。いたる所からミストの霧が出ており、快適な時間を過ごすことができた。

3. ぶらり一人旅

三日目は夜の飛行機の時間まで自由行動であったため、気になっていたアラブストリートとチャイナタウンに赴いた。移動は全て徒歩とし、目的地までに新たな発見ができないかと期待を膨らませてホテルを出発した。

(1) アラブストリート

アラブストリートは、ホテルから徒歩30分程度にあるイスラム教徒が多く生活する地区である。これまでの人生でイスラム教に触れることがなかったため興味があった。

しかし、現在は断食期間中であったため、街は閑散としていた。(写-1)飲食店は多くが閉まっており、屋台街も人気すら感じられなかった。(写-2)この地区で昼食を考えていたが、あまりにも街が停滞していたため午前中のうちに切り上げて次の目的地へと移動した。また訪れる機会があれば、断食期間以外のシーズンに訪れたいと思う。



写真1 街の静けさにマッチする怪しい壁画



写真2 人気の全くない屋台街

(2) チャイナタウン

チャイナタウンは、アラブストリートと同じくホテルから徒歩30分程度の場所に位置する。アラブストリートとは打って変わって活気があった。(写-3)シンガポールの人口の7割は中華系からなっている。そもそも中国人が多いことも一つの要因である。確かに思い起こせば街の中心部に「中国銀行」と看板を掲げた超高層ビルが一際目立っていた。世界における中国の力は相当凄いものだと改めて感じさせられた。

チャイナタウンでは、駅近くにあったスーパーに立ち寄った。ここでは、妻に頼まれていた東南アジアの調味料を購入。値段を確認するととにかく安かった。例えば、東南アジア圏でよく使用されているチリソースにおいては、日本で買う値段の3割程度で購入できた。逆に日本製のマヨネーズなどは日本での販売価格の5割増しで商品棚に陳列されていた。やはりご当地ものは現地で購入するのが一番だ。

4. 気づいたこと

(1) 夜でも活気づく街

二日目のマリナ地区で鑑賞したナイトクルージングの船乗り場にて、乗船待ちをしていた際に街の雰囲気は心を奪われそうになった。場所はクラーク・キー地区。帰国後調べて知ったのだが、シンガポールきってのナイトスポットとして紹介されていた。地区一帯が色鮮やかなイルミネーションで纏われており、バーやクラブが軒を連ねる。ナイトクルージングが終わり、皆がホテルへ帰るバスには乗らずそのまま街へ繰り出した。

訪れたバーは、バンドが生演奏をしており演奏を聴きながらお酒を飲む。この環境は、私にとっては最高のシチュエーションである。あたりを見渡せば、歌を口ずさむ客や体を激しく動かして踊っている客もいた。店で提供しているビールは1杯1000円とかなり値を張るが、とてもいい雰囲気であったため全く気にならなかった。

(写-4)

こうしたことから、私の中でクラーク・キー地区は本旅行にて一番のお気に入りの場所となった。ぜひもう一度訪れたいと思う。

(2) 異常なほどの法治国家

シンガポールは街の美化にかなり敏感な国である。このため街の至る所に監視カメラが設置されており、ポイ捨てや禁止場所でのたばこの喫煙の監視をしている。それ以外にも、横断歩道外の道路横断なども監視されているらしい。旅行中はカメラの設置状況に注目していたが、確認できた中で最も驚いたのは、地下鉄タンジョン駅の出入口であった。出入口には異常なほどの数の監視カメラを設置しており、ついついデジカメで撮影してしまった。数えてみると半径3m内に24個ものカメラが設置されていた。(写-5)世界でも有数の法治国家とは聞くものの、その異常さには驚かされた。

5. さいごに

旅行前のイメージとはガラッと変わり、ものすごい勢いで発展・成長している都市というイメージが変わった。

海岸線付近では新たな埋め立てを行い、次から次へと開発事業を計画しているという。これほどのスケールであれば多くの雇用を生み出し、世界中の企業誘致だけではなく、観光客の誘致に成功するのも納得だ。他国ではなかなか体験できない特別な国であると感じた。



写真3 活気を見せるチャイナタウンの街路



写真4 バーで記念撮影



写真5 恐ろしい数の監視カメラ(ムダ?)

魅力的な景観 シンガポール

設計部 橋梁構造課 主任
三本 高義 (2019年入社)

1. はじめに

海外研修旅行としてシンガポールを訪れた。私にとって台湾・ハワイに続く3度目の海外である。

シンガポールは以前から訪れたい国の1つであり、行けると決まった際には心が躍った。

2. シンガポールの文化

シンガポールと言えば、多国籍国家として有名だ。それでいて治安も良い。民族構成は中華系70%、マレー系15%、インド系10%、その他5%となっている。

シンガポールが建国されたのは約50年前であるが、言語・文化・宗教がそれぞれの民族で違うにも関わらず、この短い年月でここまで国家として成長していることには驚きを隠せない。時代は違うが、事例として中国の王朝である秦が中華を統一した際に、法治国家体制をとったが、わずか15年で滅んでいる。

シンガポールは建国した際に共通言語の設定はするものの、憲法において国民は民族・宗教・出自などに関わらず平等であることや、思想・信仰の自由、差別の禁止を規定することで、各民族の文化的背景を尊重し民族間の調和を図っているようだ。

文化形成の違いを配慮せず、秦の法を中華全土に強制した秦と、それぞれの文化を尊重し民族間の調和を図ったシンガポール。文化形成という面で成功した1つの要因はそこにあるのかもしれない。

以下に観光して気づいたことについて述べていく。

(1) 罰金制度

シンガポールの町並みを見て気になったことがある。それはゴミが全くと言っていいほど落ちておらず、非常に清潔であるということだ。そんな素晴らしさを保っている理由は厳しい罰金制度にある。

シンガポールでは様々な罰金制度がある。その内の1つがゴミを路上に捨てた場合、最大1000\$もの罰金が科せられる。他の項目で驚かされたのが、ガムの持ち込みで10000\$、未申告でのタバコの持ち込みは5000\$というものだ。

なぜこのような罰金制度をとる必要があったのか。それは文化・宗教・習慣も違う他民族を統制するために厳格な社会のルールが必要であったからである。その中で人口の大多数を占める中華系の国民のマナーの悪い習慣を正すためでもあったようだ。

ちなみに横断歩道を利用せずに道路を横断した場合にも罰金が科せられるようだが、横断歩道が少ないためか違反する人や、歩行者の信号無視は当たり前のように見

受けられた。法律としては存在するが、罰金制度の種類によってはそこまで厳しく取り締まっははいないのだろうか。

(2) 交通面

観光していて気づいたのは主要な幹線道路は片側5車線という道路幅員の広さであるということだ。また主要幹線道路から少し外れた道路はほとんどが一方通行である。

これは渋滞がなるべく発生しないように都市計画しているのだという。

ガイドの説明によると、車を購入するためには所有権を入札で取得しなければならず、10年間の有効期限付きで金額は約300万円にもなるそうだ。

また朝夕のラッシュ時に車で街の中心部に入っていく際に料金を払わなければならないようだ。そのため、その他の時間帯はタクシーの料金が非常に安いにも関わらず、朝夕は高額になってしまうのだ。

このような規制を行うことで渋滞の発生しない都市を形成することに成功している。

3. シンガポールでの観光

シンガポールに着いて最初に訪れた観光地はマーライオンパーク。当初は世界三大がっかり名所と呼ばれていたが、現在は周囲の開発とともに移設され、栈橋を設けることで360°全ての角度から見られるようになったため観光名所となっている。ただ私としては今ひとつ圧倒さに欠けるように感じる。夜になるとマーライオンを含め、周囲もライトアップされるため非常に綺麗である。

次に向かったのは、マリーナ・ベイ・サンズの3棟のホテルタワーの上に位置する空中庭園とも呼ばれる展望台。地上200mの高さから見下ろす景色は圧巻である。ここから眺める夜景はさぞ綺麗だろう。



写真1 マーライオンパークにて



写真2 展望台からの景色



写真3 マリーナ・パラージ（貯水池）

展望台の案内板を見ているとマリーナ・パラージという貯水池に目が留まった。どこにそんなものかと思えるほどに貯水池には見えないデザインである。こちらはレジャースポットとしても利用されているようだ。

一般的な建築物だけでなくこのような貯水池までもが画期的であるのはシンガポールならではのだろう。

昼食を挟み、次に立ち寄ったのがガーデンズ・バイ・ザ・ベイという植物園。世界トップレベルの緑の国を築き上げるために政府が取り組んでいるのが緑化政策だが、その象徴とも言えるのがこの植物園である。

ここにそびえ立つ、未来都市のツリーをイメージさせる人口の木、スーパーツリー。一見魅せるためのデザインに思えるが、園内の維持に大きな役割を果たす多機能な人工樹となっている。

その機能とは、上部の広がった形状部分から雨水を受け止めて庭園に水を供給。また太陽光発電パネルを内蔵し、発電した電気を使って夜間のライトアップも行っている。さらには園内の樹木等の枝もバイオバス発電に利用し、そこで発生した燃えかすも園内にて肥料として活用されるという。なんとも合理的なシステムであろう。

実際に園内に進んでいくと、その維持管理にどれだけの手間がかけられているのかが窺える。

4. 幻想的な夜景

本旅行で一番の楽しみにしていたのがシンガポールの夜景である。TVなどでもよく特集されているが、実際に見てみると想像以上に美しい。構造物一つ一つが周囲の情景に合うように照明デザインされており、それが一体となって街全体での魅惑的な美しさを醸し出している。



写真4 スーパーツリーの空中回廊から望む

夜景スポットで有名であるのがマリーナエリアだが、個人的にクラーク・キーの夜景も非常に綺麗だと思う。こちらのエリアでは他のエリアとは違ったカラフルな照明デザインがなされており、静かで落ち着いた雰囲気である。

夜遅い時間になると、夜遊びスポットになるようでそれまでの雰囲気とは打って変わって騒がしくなってしまうため、落ち着いた雰囲気と夜景を楽しむのであれば、早い時間に訪れるのが良いだろう。

クラーク・キーではマレー半島の伝統的なバムボートに乗船し、リパークルーズを楽しむことができる。クラーク・キーからマリーナベイへと進み、マーライオン・マリーナベイサンズ・スターフライヤーと観光名所を見て回る。

中でも一番の魅力はマリーナベイサンズでのレーザーショー「SPECTRA」を間近で観ることができることだろう。SPECTRAは、多文化国家であるシンガポールが今ある世界都市として変遷してきたその過程を、4幕を通して描いているのだという。レーザー・光・プロジェクション・水が完璧なハーモニーを作り出しており、非常に緻密な設計がなされているのが窺える。



写真5 色鮮やかなネオン（クラーク・キー）



写真6 夜の街に溶け込むマーライオン



写真7 レーザーショークルージングシンガポールの街並み

最終日の自由行動では特に予定は立てていなかったが、観光する中でユニークなデザインの建築物や異文化がうまく溶け込んだ町並みをもっと見てみたいと思い、終日散策することにした。

シンガポールには日本には見られないユニークなデザインの建築物が数多くあるが、その中で気になった1つがマリーナ・ワンという超大型オフィス&集合住宅タワーである。外観はバスでの移動の際にも見ていたのだが、実はその内部が気になっていた。

マリーナ・ワンは4棟で構成され、高さ200mの2棟がオフィスタワーで、高さ139mの2棟が集合住宅となっている。4方向に開口された作りになっているため、風がうまく吹き込み、中はとても涼しく感じた。

中央にはグリーン・ハートと呼ばれる大きな中庭が配されているのが最大の特徴である。上空を見上げると、テラスの屋根が渦巻いて見える面白いデザインだ。

この他にもシンガポールには民族文化地区が多く存在し、多文化がうまく共存した町並みを楽しむことができる。



写真8 マリーナ・ワン



写真9 グリーン・ハートと呼ばれる中庭



写真10 チャイナタウンの寺院



写真11 建設現場

道中に建設現場がいくつかあったので様子を伺ってみた。元々、施工管理業務に携わっていたせいか現場の様子が気になってしまう。

どの現場にも共通して言えることだが、一番目についていたのはコンクリートの出来映えの悪さである。打ち継ぎ目や壁面にはジャンカの痕跡が見て取れる補修痕が目立つ。コンクリート自体の品質も良くないのだろうが、セパレーターの穴埋めの雑さからも窺えるようにコンクリート打設時の締め固めをはじめとする適切な施工が行われていないのだろう。完成した建築物の外観や、街全体の維持管理には目を見張るものがあるのだが、その根本とも言える施工における管理がなされていないのは非常に残念である。

5. おわりに

今回の研修旅行では美しい景観、多文化国家ならではの町並みを堪能することができた最高の旅であった。その中で、シンガポールの治安の良さ・美しい景観を創り出している発端の理由について学ぶこともできた。

まだまだ訪れたい場所があるため、次回はプライベートで訪れてみたい。

3 度目のシンガポール

調査部 調査補償課 主任
島崎 令子 (2016 年入社)

1. はじめに

今回の社員旅行で3度目のシンガポールとなった。20年前に観光で、10年前にはシンガポール人と結婚した妹の結婚式で訪れた。その当時から発展していたあの国は一体どうなっているのだろうか、あちこちで見かけた建設中の工事現場はどんなになっているのだろうか、ユニバーサル・スタジオ・シンガポールも出来上がったんだよね…などと思いながら「るるぶ情報」を見て旅に備えた。

2. 鉄板のマーライオンパーク

観光のスタートはマーライオンパークからだ。10年前と比べマーライオン自体は変化がなかったが、その前面にはマリーナ・ベイ・サンズやアートサイエンスミュージアムが建設されており、一気に都会感が増していた。

夜景はさらに美しく、海側からもライトアップされ、マーライオンも光輝いていた。この日が金曜日ということもあってか地元っばいカップルや家族連れ、犬の散歩をしている人もいて昼間とは違うアットホームな良い雰囲気だった。



写真1 日中のマーライオンパーク



写真2 夜のマーライオンパーク

3. シンボリックマリーナ・ベイ・サンズ

次の観光地は初めてのマリーナ・ベイ・サンズ。

エレベーターで展望デッキへ一気に上り、シンガポールの街を一望した。たくさんのビルが遠くまで建っている様子が見ることができ、狭い土地にひしめき合っていることがよく分かった。

話題沸騰のインフィニティプールは同じフロアの少し離れた場所にあった。入場できない(宿泊者しか)、水着になれない(個人的に)という二重の恨めしさはあったが、とりあえず1枚だけ写真を撮っておいた。

4. 都会のオアシス ガーデン・バイザ・ベイ

以前来た時はまだ鉄骨の骨組みのみで工場地帯のような場所だったが、今思えばそれはスーパーツリー・グローヴの骨組みだった。広い敷地にはドーム2棟を含め巨大な施設が出来上がっていた。植物園とのことだが、私の印象では緑豊かなテーマパークといったところで子供達の遠足にはぴったりだと思った。ドーム内には熱帯高地の植物が展示され、滝やミストが降りかかる遊歩道があり涼しく快適に過ごせる空間となっていた。



写真3 展望台からの風景



写真4 スーパーツリー・グローヴ

5. 夜景ポート&ナイトショー「スペクトラ」

夜は夕食のチリクラブをお腹いっぱい食べた後、海からの夜景を觀賞すべく海沿いの船着き場に行った。そこはすでに大勢の人達が並んでいて湿度の高い淀んだ空気が漂っていた。チリクラブですっかり満足していた私は、ちょっとうんざりしながら「船からただ夜景を眺めるのだろうか」とツアー会社の組んだ団体行動の一環と考えていた。

ところが!!このナイトショーが予想を越える美しさだった。仕事の時より目が1.5倍見開くほど素晴らしかった。最先端のレーザービームとジェット噴水、壮大な音楽、船上でシンガポールスリングを飲みながら観るナイトショーは「JTBさん、組んでくれてありがとう!!」と思わせてくれた。

6. 異国情緒のハジ・レーン

最終日は宿泊していたマンダリン・オリエンタルホテルから3kmほど北に行ったハジ・レーンに行った。この日は朝から時々日が差すまじまじの天気。・・・と思っていたが、一日中曇り空だった昨日の方がまだ良かった。日が昇るにつれ暑さは増し、その上スコールまで降ってきた。現場調査で行った真夏のビニールハウスのようである。



写真5 ポートから観るナイトショー「スペクトラ」



写真6 カラフルなハジ・レーン



写真7 カラフルに着色された設備配管

汗を拭きながらストリートを歩いていると、ウォールアートが目に入ってきた。配管やバルブまできちんとペイントされており、作者の細部までこだわる姿勢を見習わなければと改めて思った。実際、ストリートで写真をとっていると徐々に楽しくなり、暑さも忘れポーズをとっていた。

7. 最後に

20年前、10年前には「買い物天国」と謳われていた街は今や世界で一番物価の高い国となっていた。観光スポットもガラリと変わり、かつての撮影ポイントだったドリアン型の建物（エスプラネード・シアターズ・オン・ザ・ベイ）は相変わらず美しかったのだが、完全にスルーされガイドブックにも紹介されていなかった。当時、竣工したばかりのシンガポール・フライヤーでは結婚式が執り行われていたとの事だったが、今は無くなっているようだった。あまりの変貌ぶりにちょっと置いてきぼり感を感じてしまった。

しかし、全く変わっていないところもある。それは街の清潔さや治安の良さである。世界中からたくさんの外国人が集まっているにも関わらず維持されているこの安心感。また旅の間中うっとうしかった蒸し暑さも以前と変わっていないところで、最後の夜には少しほっとさせてくれた。10年後にもまた来たいものだ。

10年後のシンガポール・・・さて、どんな風が変わっていることだろうか。楽しみである。



写真8 お土産品の数々

令和元年度社員旅行 沖縄・シンガポール

令和元年 9 月 10 日 発行

発行・編集 株式会社 第一コンサルタンツ
〒781-5105 高知県高知市介良甲 828 番地 1
TEL 088-821-7770
FAX 088-821-7771

印刷・製本 有限会社 西村謄写堂
〒780-0901 高知県高知市上町 1-6-4
TEL 088-822-0492
FAX 088-825-1888

